

國こく
性せい
爺や
合がっ
戰せん

解題

正徳五年十一月一日から、初めて大阪の竹本座に上演された。作者は近松門左衛門(六十)である。(「國姓爺合戦」と書くべきである。〔實説を見よ〕が、原本に「國姓爺合戦」とあるに従つた)

本曲は巢林子傑作の一であつて、五巻に分れてゐる。其の中で第一の、「海道かいどうの港の戦」、第二の「千里が竹」、第三の「獅子が城」などは最も名高い。

竹本座では、義太夫の元祖竹本筑後掾が、正徳四年九月十日に歿してからは豊竹座に壓せられ、且つ後繼者に就いても紛擾を起してゐた。近松は筑後掾の遺志を重んじ、若年の政太夫を助けて勢を盛返さうとして蹶起し、構想を凝らし詞章を練り、以て本曲を力作して政太夫に與へたものである。

實説

本曲は、鄭芝龍と其の子鄭成功などが、清兵に抗して轉戦した最近の史實に據り、「國仙野手柄日記」(後三十四年頃の作か)をも讀んで、藝術化したものである。

鄭成功(本曲云)鄭芝龍が明から日本に來り、平戸に寓してゐた頃田川氏を娶り、天啓四年(我が寛永元年)七月鄭成功をまうけた。

崇禎三年(我が寛永七年)鄭成功七歳の時、父から呼ばれて平戸を出發し、福建省安海に行き、十五歳の時南京大學に入る。崇禎十七年(清の順治元年)流賊李自成京師を陥れ、明の毅宗帝煤山で縊り、明の福王が南京で帝位に即く。之を弘光帝といふ。次の年清兵(我が正保元年)南京を陥れ、弘光帝は生捕られて弑される。是に於て唐王が福州で帝位に即く。之を隆武帝といふ。鄭成功(二十)は父に従つて

隆武帝に謁し、國姓朱を賜はり忠孝伯に封ぜられたので、人呼んで國姓爺といふ。朱舜水が初めて日本に來たのもこの時である。弘光元年(隆武元年。清の順治二年)我が正保二年)李自成は清兵と戦つて大敗し、自ら縊つて死す。隆武二年鄭芝龍清に降つて北京に護送され、成功の母は泉州で自殺した。成功は義兵を擧げようとして南澳に奔る。清兵遂に福州を陥れ、隆武帝を殺す。永曆元年(清の順治四年)我が

四年（我が正保）永明王が廣西の肇慶府署で位に即く。鄭成功は明を奉じて南澳を出發し、鼓浪嶼に據つて兵を進め、泉州を攻めて清軍を破る。永曆三年（我が慶安二年）鄭成功は延平公に封ぜられ、兵を發して漳浦を陥れ、潮州を伐つ。永曆六年（我が承應元年）鄭成功は、北京に在る父鄭芝龍から招かれたが、義を守つて之に應ぜず。永曆九年（我が明曆元年）鄭成功、安平鎮・惠安・同安・南安を攻めて之を破る。この年彼は書と物とを日本に贈る。永曆十二年（我が萬治元年）鄭成功（三十歳）は延平郡王に封ぜられ、南京を攻略しようとして大軍を北方に進める。そして使者を日本に遣はして書と物とを贈る。永曆十三年鄭成功瓜州を破り、鎮江府に克ち、金陵を攻めて大敗し、甘輝等の宿將概ね戦死したので厦門に歸る。永曆十四年鄭成功は、滿漢の大軍を金門灣の海上に迎へ撃つて之を破る。永曆十五年（我が寛文元年）鄭芝龍等は、北京で斬刑に處せられて市中に晒され、永曆帝は吳三桂に生捕られ、遂に明の帝室絶える。康熙元年（我が寛文二年）五月八日鄭成功臺灣で病歿した。年三十九。

鄭芝龍（我が寛文二年）字を飛黃といひ、明國泉州府南安縣の人。萬曆の末屢々日本に來り、遂に平戸に寓して田川氏を娶り、成功及び七左衛門をまうけた。天啓五年臺灣海賊の首領となる。崇禎三年都督に任ぜられ、同十三年福建參將に任ぜられ、三省總戎大將軍となり、同十七年南安伯に封ぜられ、隆武元年（我が正保二年）平國侯に封ぜられた。然るに彼は夙に世運の非なるを悟り、日本に援兵を請うて得ず、志を韃靼に寄せて内通し、隆武二年清に降つて北京に護送され、永曆十五年（我が寛文元年）北京で棄市された。

田川氏（我が寛文二年）肥前國平戸の士分の家に生れ、鄭芝龍の妻となつて、天啓四年鄭成功を生んだ。鄭成功は七歳の時支那に渡つたが、孝心深く常に東を拜し、母を慕つて泣いてゐたので、母も遂に意を決し、隆武元年（我が正保二年）安平鎮に赴いた。同二年清軍が大舉して福州を攻めた時、鄭芝龍は清に心を寄せてゐたので、安海にあつて故意に戦を避けた爲、敵兵泉州城に侵入し、鄭芝龍の泉州の邸宅も破壊され、田川氏もこの難に死した。

甘輝（我が寛文二年）鄭成功股肱の將である。永曆十一年（我が明曆三年）寧徳を攻めて、清將阿克讓を斬る。永曆十三年（我が萬治二年）鄭成功の軍將となつて鎮江府の戦に勝ち、尋いで金陵を攻める時、鄭成功が甘輝の謀を用ひなかつた爲、甘輝は遂に清將梁化鳳に破られて戦死を

遂けた。

吳三桂「字は長白。遼東の人。崇禎年間遼東總兵となり、清軍を拒いだ功によつて平西伯に封ぜられ、山海關を鎮す。崇禎十七年（我が正保元年）流賊李自成京師を陥れ、毅宗帝煤山に縊る。吳三桂乃ち援軍を清に請ひ、李自成を破つて平西王に封ぜられ、雲南を鎮す。永曆十五年（我が寛文元年）永曆帝を擒す。康熙十二年清に叛いて兵を擧げ、旬月の間に雲南・貴州・四川・湖南・廣西の地を有ち、周帝と稱して百官を置いたが、康熙十七年（我が延寶六年）病歿した。

影 響

本曲は非常な好評を博し、初上演の初日から享保二年の春まで、十七ヶ月に亙つて大入を續けたといふ。「南水漫遊」拾遺卷二に、「國姓爺合戦の戲文は世人今に賞美なす。近松氏生涯第一の秀作なり。正徳五未年十一月朔日より三年越し十七ヶ月大當なりし。二度目は享保五年子正月二日より勤め、三度目は同十六年亥五月に勤め、四度目は寛延三年午七月に勤め、其の後數度興行に及ぶといへども、いつとても大當りならざるはなし」とある。

かくも人氣を得た所以は、その頃支那で起つた鄭芝龍父子の史實を脚色して、異國の風景風俗などの目新しい所を見せ、且つ日本の美風を宣揚した。そして其の主人公鄭成功は日本生れで、當時なほ喜ばれた金平風の勇者であつた。其の上に人物の配合も場面の變化も、舞臺道具も音曲も人形の活躍なども、皆揃つて好かつた爲であらう。

本曲の好評に味を占めた近松は、引續いて「國姓爺後日合戦」（享保二年二月）（竹本座に上演）を作り、其後又「唐船嘶今國姓爺」（享保七年正月）（竹本座に上演）を作り、紀海音もまた「傾城國姓爺」を書いた。

歌舞伎でも「國姓爺合戦」が、享保元年秋京都の都萬太夫座に上演され、同二年三月大阪の嵐大三郎座・荻野八重桐座の兩座に上演され、同年五月江戸の中村座・市村座の兩座に上演された。其の後文久三年正月から、中村座で「國姓爺合戦」が上演され、其の二月には、市村座で「國姓爺合戦」を世話に碎いた「三題咄高座新作」が上演され、明治二十年四月には、更に之を碎

いた「國性爺理髮姿鏡」が千歳座に上演された。

「國性爺合戦」の影響を受けて作られた小説に、「國性爺御前軍談」(素讀西氏安齋)、
 「國性爺明朝太平記」(享保二年刊)、
 「國性爺明朝太平記」(江島其磧撰)、
 「風傾性爺群談」(八文字屋自笑撰)、
 「九州和藤内唐土船」(閑樂子撰)、
 「和唐珍解」(唐來三和撰)、
 「國性爺倭話」(東西庵南北撰)、
 「國性爺忠義傳」(石田玉山撰)、
 「唐人髮今國性爺」(柳亭種彦撰)、
 「國性爺合戦」(天保五年刊)、
 「忠國性爺將某合戦」(萬草應賀撰)、
 「文化至天保年間刊」(文政八年刊)、
 「國性爺合戦」の第二「濱傳ひ」は、江戸の人原寒竹によつて謡曲に作られ、「和藤内」と題して寶曆六年に刊行された。また
 第三「獅子が城」(樓)は、長崎の譯司周二右衛門によつて漢譯され、其の文は「南水漫遊」拾遺卷二に載つてゐる。國性爺が、菓子の名に附けられ、又玩具や著物の模様になされた事は、「國性爺御前軍談」の序文に見え、人形店の飾人形にされ、又浮世繪に描かれた事は、「國性爺明朝太平記」の序文に見えてゐる。現今では「千里が竹」「獅子が城」などが、國文教科書中に採られてゐることは、世人のよく知る所である。

第一 (思宗烈皇帝の宮)

登場人物の主な者

- | | | | | | |
|-------|----------------|-----|---------------|----|-------------|
| 思宗烈皇帝 | 大明十七代の皇帝、光宗 | 華清夫 | 人(思宗烈皇帝の寵姫) | 柳歌 | 君(吳三桂の室) |
| 皇弟 | 皇帝の第二皇子、四十歳 | 李天 | 天(大明國の右軍將、逆臣) | 吳三 | 桂(大司馬將軍、忠臣) |
| 王 | 王(樸靺國の鎮護大將) | 李海 | 方(李蹈天の弟、逆臣) | 安大 | 人(李蹈天の侍大將) |
| 梅檀皇女 | 女(思宗烈皇帝の妹、十六歳) | 李海 | 方(李蹈天の弟、逆臣) | 安大 | 人(李蹈天の侍大將) |
| 剛 | 剛(安大人の部下) | | | | |

國性爺合戦

梗概

崇禎十七年四月上旬、大明十七代思宗烈皇帝の寵姫華清夫人が去年秋から懷妊され、この月が臨月に當るので、御産の用意が行はれ、吳三桂の室柳歌君を始め數多の官女に、御乳附の役・乳人・侍女などの任命があつた。折節韃靼主順治大王から貝勒王を使者として、虎の皮・豹の皮・南海の火浣布・鄧支國の馬肝石などの貢物を獻じ、己が妃に華清夫人を迎へたいとの難題を申込ませた。右軍將李蹈天は、かねて韃靼王に款を通じてゐたので先づ口を切り、「今から四年前飢饉の際、韃靼國から米粟數百萬石の救助を受けた」と偽り、「其の返禮に彼の所望に従つて、華清夫人を御譲りなさるべきだと存じ上げます」と奏上した。大司馬將軍吳三桂は待漏殿に居て之を聞き、李蹈天の膝元に進み出で、「大明には五常五倫の道があり、天竺には斷惡修善の道があり、日本には正直中常の神明の道がある。然るに韃靼國には道も無く法も無く、所謂畜生國である。貴方は我が國が韃靼國から救助を受けたと申されるが、さやうな事は疑はしい。まして教慮も計らず、御懷妊の后を輕々しう夷の手に渡さうといふ心底、いかにしても納得できぬ。畜生國からの貢物は内裏に汚らはしい。官人どもそれ取棄てよ」と言ひ放つ。貝勒王大いに怒り、「合力を受けながら報恩の心無き明國こそ、無法無道の國だ、畜生國だ。よし／＼今に軍兵を差向けて、帝も后も生捕つて、我が大王の履持にする」とて、席を蹴立てて歸らうとする。李蹈天「暫くお待ち下され」と、聲を掛けて之を宥め、身を捨てて君を安んじ、國の恥を清める忠臣の仕業を御覽ぜよ」とて、刀を抜いて左眼を抉り出し、「これを御持ち歸り下さい」と、笏に乗せて貝勒王に差出す。李蹈天のこの行爲は、韃靼に内應する誓であつたとは後に知られた。貝勒王は之を受取つて押戴き、「天下の爲に身を捨てて、事を治める御志感服しました。これを土産と致せば后を迎へ取つたも同然。我が大王もさぞ叡感されませう。使者の我も面目に存じます。これでお暇申す」といふ。皇帝は吳三桂・李蹈天の兩人をめめて、宴樂殿に入り給ふ。

明察なき皇帝は、益々李蹈天を忠臣と信じ、かねて李蹈天を嫌ふ妹の梅檀皇女を、彼に降嫁させようとし、一策を按じて、官女二百人を繰出し、梅枝を持つ者と櫻枝を持つ者との二隊に分ち、花軍をさせた。そして櫻散つて梅勝つて梅檀皇女の勝とし、

梅散つて櫻勝てば皇女は李滔天に嫁せねばならぬと定めた。然し皇帝は前以て梅が負けるやうに言合めてゐたので、まんまと櫻の勝となる。この風流陣の騒ぎに驚いた吳三桂は、駈附けて梅も櫻も薙散し、李滔天が反逆を抱いてゐる事を纏々と述べて、君を諫めた。皇帝憤怒し、李滔天を猜み罵る汝こそ逆臣だ」とて、吳三桂を蹴る。吳三桂はなほも皇帝の御衣に縋り付き、涙にくれて諫める。この時人馬の音騒がしう聞え、やがて李滔天の導きで貝勒王が、大軍を率ゐて攻寄せた。餘りの不意討に吳三桂は、思案にくれたが覺悟を定め、速かに吾が妻柳歌君に梅檀皇女の御供させて、金川門の細道から遁れさせた。そして自らは百騎に足らぬ手勢を以て、蒙古の大軍を拒ぐ。其の間に李滔天・李海方の兄弟は、宮中深く入つて皇帝を弑し、后華清夫人を擽めて引立てる。吳三桂は其の場以後戻りして皇帝の尊骸を見、愁歎にくれながら、御肌に召された皇帝の御位のしるしの印綬を取つて懐に納め、李海方と渡り合つて之を斬棄て、後の縛を解いて御手を引き、妻の置去つた我が嬰兒を戟の柄に括り附け、血路を開いて落ち延び、海道に港に辿り著く。折から后は敵の撃出す彈丸に中つて、あへない御最期を遂げられる。吳三桂は之を見て失心せんばかりに歎いたが、心を取直して後の御腹を切開き、胎内の御兒を取出し、後の御袖を引ちぎり。之を押包んで携へ、敵に之を悟られぬやうに、我が兒を刺殺して後の御腹に押し入れ、涙を呑んで立去る。(これより、海道の)

柳歌君は梅檀皇女の御供し海道の港口まで来て、李滔天の侍大將安大人の追撃に遭ひ、敵の部下剛韃を水の中に突落して舟を奪ひ、梅檀皇女を乗せまゐらせ、自らも乗らうとする所に、剛韃は水を潜つて岸に上り、二十騎と共に攻寄せた。柳歌君乃ち力戦して敵を斬拂ひ、剛韃と組んで捻伏せ跳返し、命限り根限り揉合つたが、遂に剛韃を刺殺す。自らも數多の深傷を負ひ、最早この痛手では御供は叶ひませぬ。妾がここに蹈止つて押寄せ敵と戦つてゐる間に、早く其の舟で沖へくと御連れあそばせ。今生の御暇を申上げます。南無諸天諸佛別して八大龍神、萬乘の君の姫宮の御舟を守護し給へ」と合掌し、舟槳を取つて押出せば、舟は沖へと流れ行く。舟中では皇妹が御顔に袂を押當てて咽び入る。濱の松風・波の音も聲添へて、一入の哀れを増す。柳歌君は次第に弱り行く身を、杖突く劔に支へてよろめきながら、礪山嵐に亂れる髪を搔上げて、名残惜しげに見送る。

評

海道の港で、柳歌君が敵軍と奮戦する場合は、振ひ立つ烈女の剛勇を寫して、痛快を極めた。また其の柳歌君が姫宮と別を告げる場合は、哀愁を叙して讀者の胸を打つ。それ等の背景に濃邊の情景を織込んだ其の妙文は、松籟・波の音と共に、とこしへに響くであらう。

第一の内 (海道の港の戦)

- 港口 海道の港口。豊洲麻割岸にある。
- 遁るるだけ 遁れ得るだけ遁れよう。
- 李蹈天 大明國の右軍將。魏國國內應ぜ。遊降。
- 后 大明十七代忠烈皇帝の寵姫孫清大。
- 吳三桂 大明國の大司馬將軍。忠臣。
- 人前 面目。
- 我武者 我を強る武者の義。るのしし武者。

柳歌君梅檀女を誘ひ、港口まで落延びしが前後に敵滿ちたり、サア是迄ぞ遁る、だけ」と、茂る蘆間を掻分けて身を忍びてぞ隠れ居る、李蹈天が侍大將安大人、手勢引具しどつと駈寄せ、今の鐵砲確に后が吳三桂に中つたと覺へし」と、あたりを見廻し「こりや見よ、后を仕留めたはハア腹を切裂き、懷妊の王子迄殺した、忠節立する吳三桂、主君を捨て名を捨てても命惜しいか、彼奴は人前廢つた、此上は彼が妻の柳歌君、梅檀女を尋るばかり眼を配れ高名せよ」と、四方に分れ走り行、中にも剛毅といふ我武者者、いで梅檀女を召取一人の手柄にせんと、鎧の上に蓑打掛け、海土の小舟に棹さして入江々々を漕廻り、此蘆の陰が氣

○舟端を踏外し 剛毅が舟端を踏外し。

○壘み掛け 物事をつづけざまにする。「今宵の心中」土之巻に「真向を四つ五つ壘みかけて食はする。」

○無用の拔駈け 剛毅めが力も無いくせに、無用の拔駈けの高名を立てようとして、ひび目に遭はされたミの意。

○舟迄仰付けられた 自分「柳歌君」等の乗るべき舟まで天から授けられて、之に乗れよミ仰せ付けられた。

○渡りに船 もつげの幸ひの陰にいふ謎。「法華經藥王品に「如渡得船、如病得醫、如暗得燈。」

○船中に隠し置きたる劍 剛毅が船中に隠してゐた劍。彼は鏡の上を羨著て海士の姿に變装してゐたのであるから、劍も隠してゐたのである。

○そつちから當がうた此劍 敵の落してゐたのを拾うた劍なれば、かくいふ。

○岸の岩角切先に 岸の岩角に打付けた刃物の切先に、「岸」切先は、同じ首音によつた所謂双韻法。

○雷光石火 雷光石火に同じ。極めて短い時間に臨み、そして切先を岩角に打付けて發する火にひかけた。

「道ひな」と押分る權の先、柳歌君しつかと取力に任せて跳返せば、舟端を踏外し

眞俯向けにかつばと沈み、浮上らんとする所を權も折れよと壘みかけ、打てば沈み浮かめば打、息も繼がせず泥龜の、泥を泳ぐが如くにて水底潜り落失せけり、

「エ、無用の拔駈け殊に舟迄仰付けられた、渡りに船とは此事」と、船中に隠し置たる劍取て横たへ、桝檀女を乗せ參らせ我も乗らんとせし所に、何處より這上り

けん剛韃鎧も濡れしづく、戟提げて甘騎ばかり餘すまじと追かくる、「ハア忙がし

や御覽候へ、敵手ひどく追かくれば暫し防ぐ其間、船底に隠れまませ」と、拾

ひし劍と腰の劍二刀に振つて待かけたり、剛韃程なく駈け附「憎い女め、權で打

つた返報」と、長柄の戟押取伸べて突つ掛くる、「ヲ、そつちから當がふた此劍こ

つちからも返報」と、切て廻れば廿餘人女一人に切立られ、陸に惑へる蘆邊の鷗

ひと羽も立たず討るも有、痛手を受けて逃るも有柳歌君も剛韃も、數ヶ所の深手朱に

成て一叢蘆を押分々々、追入追込互ひの眼に血は入たり、前後も分かぬ盲打岸の

岩角切先に、雷光石火の命を限り危かりける、有様なり、剛韃戟も切折られ、膝

行寄つてむんずと組柳歌君が持たる劍、振取らん／＼と擦合ふ足を踏みためず、

◇子を連れだ獅子は、敵に出會つた時に最も強いといふ。柳歌君のこの剛勇も不思議ではない。

○姫宮様 梅檀皇女をさす。

◇獅子王の如き烈女の、其の女らしい詞つき、何とも言へぬ親しみを感ずる。

○落ち給へ 逃伏給へ。

○諸天 上界の諸神。

○八大龍神 (1) 毘陀龍王、(2) 跋陀龍王、(3) 娑羯羅龍王、(4) 和修吉龍王、(5) 德叉迦龍王、(6) 阿那婆達多龍王、(7) 摩那斯龍王、(8) 優鉢羅龍王。この文は、海上安穩なれと希ふのであるから、龍神に祈つたのである。

○萬乗の君 帝王をいふ。古は戦に車を用ひた。故に封地の大小を車敷で示した。兵車萬乗は天子をいふ。

○涙しをるる 梅檀皇女がしをれて涙にくれる。「しをるる汐風」は頭韻法。

○友千鳥 群れる千鳥。これに「友とせんにをいひかく。

○生死の海は渡れども 今までは愛慕の世に長らへたれども、惑界の衆生は必ず生死の苦を受ける。生死の苦は際進なきを以て、これを海の深廣なるに喩へて、「生死の海」といふ。これに生死の境に入らした意をきかした。「千鳥」「海」は縁語。

○夫 吳三様をいひ、海道の港から何方へか落ち延びた。

○子 海道の港で、帝王の子の身がはりまなつて父に殺さる。

仰様にかつばと伏す直に乘て乗懸り、刺通し刺通し首ふつ、と搔切て、につこと笑ひし心の内嬉しき類なかりけり、なふく姫宮様御身には怪我も無かつたか、舟は其儘其處にか」と、よろぼひ寄つて「此體では船中のお供はならぬ、又敵が寄せ來ればもうどふも叶はぬ、潮に任せ何國迄も落給へ、沖へ舟の出るまでは此女が陸に控へた、敵何萬騎寄たりとも命限り腕限り、さりながら主従二度の對面は御縁と命ばかりぞや、随分御無事で、南無諸天諸佛別しては八大龍神、萬乗の君の姫宮の御舟を守護し給へや」と、舟梁取て押出せば、折しも退汐の名残を何と梅檀女、涙しほる、汐風に龍神納受の沖つ風、沖を遙に流れ行「あら心安や嬉しや、よし此上は生延びても我身一つ、死んでも誰を友千鳥生死の海は渡れども、夫の行方子の行方、君が行方は覺東波の浮世の海を越へかねし、渡りかねしと言はば言へ此、一心の疾風舟、仁義の艦權武勇の楫は、折ても折れぬ沖つ波寄來る鯨波か」とて、劔に縦つてたぢく、よろぼひ寄方の、磯山風松の風亂れし髪を搔上て、あたりを睨んで立たりし、和漢女の手本紙筆にも、寫し傳けり

○浮世の海を越えかねし 現世に天壽を全うしかねて、非業の死を遂げた。
 ○疾風舟 疾風に追はれて走る舟。以て逸は

やしる一心を藏してゐる身に喩ふ。
 ○仁義の艦權：折れぬ 仁義武勇を勵まうにも、身に深手を負うてゐて、其の働きが出來ないが、それでも、心はひるま

ずの意。この文は、「波」「浮」「海」「越え」「渡り」「疾風舟」「艦權」「折れ」「沖つ波」、いづれも縁語で續けた。
 ◇濱松風の中に立つ烈女の姿、勇しい限りである。

第 一 (平戸の濱邊。)

登場人物の主な者

- 和藤内三官 (母は肥前平戸の女) 小 陸 (平戸の漁夫の女) 梅 檀 皇 女 (思宗烈皇帝の妹。十六歳)
- 老 一 官 (もと明帝に仕へて大) 老 一 官 の 妻 (平戸の浦人の女) 安 大 人 (勢子の大将)
- 勢 子 大 勢

梗 概

〔濱傳ひ〕 明國の忠臣、大師、大爺、鄭芝龍は、思宗烈皇帝を諫めて容れられなかつたので、去つて肥前國松浦郡平戸に渡り、名を老一官と改め、平戸の浦人の女を娶つて和藤内を儲けた。和藤内は平戸の漁夫の女小睦を娶り、夫婦共に漁業に従事してゐる。和藤内二十歳の十月の夕方、備中鉞を擔ひ魚籠を携へて、小睦と共に濱邊に出で、沙の干瀉を勦返して色々の貝を拾ふ。折節鵜が蚌を啄まうとして、蚌の貝殻に挟まれ、互に争ふを熟と眺めて、兩雄を闘はせて其の虚を討つといふ軍法の奥義を悟る。そして彼は、今明國と鞏韌國と相争へるに乗じて唐土に渡り、この二國を併呑しようと工夫を凝らした。小睦は鵜と蚌との争を見てをかしがり、走り寄つて引分け逃してやつた。

〔唐土舟〕 空が時雨模様となつたので、和藤内夫妻は急いで歸らうとする。この時洲崎の方に二八ばかりの唐の貴女を乗せた舟が漂著した。やがて其の貴女は舟から濱邊に下り立ち、和藤内夫妻を見て驚く。其の愁に沈んだあてやかな顔容は、羽衣を失つた天つ乙女の如くである。和藤内走り寄つて、互に唐語で語り合ふを、側で聞く小睦は何の事やら釋は分らず嫉妬に燃えた。和藤内は妻に對ひ、「この御方は以前父が仕へた明帝の御妹宮梅檀皇女と申上げ、國の亂を避けてこの地に漂著された。父にこの事を知らせて早く呼んで來い」といふ。小睦はかねて父から明帝の話を聞いてゐたので、直ちに合點し、「御いたはしや、この地に御著なされたも、盡きせぬ主従の御縁でありませう。只今父を呼んでまゐります」とて、急ぎ歸る。老一官夫妻は松浦の住吉社に詣でて歸る途で、小睦に逢つて仔細を聞き、梅檀皇女の所に行つて禮拜し、「私は明帝の舊臣鄭芝龍であります」とて、皇女と共に互に身の上を語り合ふ。其の話によつて、明國は逆臣李滔天の爲に韃靼夷の侵す所となり、思宗烈皇帝は弑せられ、吳三桂夫妻の忠節によつて、皇妹がこの地に漂著された由を知り、皆愁歎にくれる。和藤内は既に鶴と蚌との争を見て、軍略の奧義を悟つてゐた上に、易を按じて明國に向ふの吉であるを知り、「この上は吳三桂と共に義兵を擧げ、李滔天一味の逆賊を滅し、韃靼夷を撫斬にして大明の世に翻し、凱歌を上げよう」と、勇み立つた。父も大いに感じ、「オ、頼もしい」とて、直ちに同意し、親子三人手筈を定め、老一官夫妻は肥前藤津の浦から船出する。和藤内は平戸の浦から船出しようとする。小睦は夫が梅檀皇女と共に乗船して、自分を置去りにするものと思ひ憤怒する。和藤内乃ち後事を依頼して皇妹を托し、別を告げて船を押出す。小睦は渚に立つて離れ行く夫の船を望み、巖に斷登り足を爪立てて延上り、手拭を振り聲をあげ、船が雲霧に隠れるまで名残惜しげに見送る。

〔千里が竹〕 老一官親子の船は、神風に乗じ八重の潮路を押し切つて明國に安著する。鄭芝龍は妻子に對ひ、「明國は戰亂の爲に昔と變り、舊知の者もどう散つたやら尋ねやうもなく、忠臣吳三桂の生死も知れねば、たよるべき方もない。ただ思ひ出すは天啓五年故國を去つた時、二歳になる娘を置去りにした。其の娘の母は難産で死し、父母の顔も知らぬ孤兒が、天道様の御恵みを受

けて成人し、今は獅子が城主五常軍甘輝の妻となつてゐると聞く。頼むはこればかり。其の獅子が城まで道の程百八十里ある。親子三人連立つては人も怪しまう。我一人道をかへて先に行くから、お前たちは後から来い。これから先は千里が竹とて、虎の居る大藪がある。それを過ぎれば狸々の栖む潯陽の江、其の先は昔東坡が流された赤壁といふ所。其處から獅子が城へはいか程もない。我は赤壁でお前らの来るを待受けて、手筈を定めよう」と別れる。

和藤内は母を伴ひ、父の教に従つて辿り行き、方角とでもしら雲の埋む千里の竹に迷ひ入る。折節大勢が鳴物入りで攻寄せる聲が聞えて来る。和藤内耳を欽て、「はて何事か」と、立留つた所に、一陣の風砂塵を吹きまくつた後に、竹藪を踏分けて猛虎が現はれ、和藤内を目懸けて噛みつかうとする。和藤内乃ち猛虎と力闘したが、母から與へられた伊勢大神宮の御護符を虎に差向けて之を威服する。其の時勢子の大將安大人等の虎狩の一隊が現はれ、「これく風來人、其の虎は我が主君李滔天の命を受けて狩出したものだ。早々渡せ。文句を附けると打殺すぞ」と喚く。和藤内は李滔天と聞いて、それこそ望む敵と大いに喜び、「ヤア餓鬼等忠義立を言やがる。我が生國は大日本。風來とは頭が過ぎた。虎が欲しいなら其の李滔天とやら石花菜とやら、ここへ突出してあやまらせろ。それまでは斷じて其方等のいふやうには出来ない」と睨付ける。勢子等は、「だまれ。彼奴討取れ」とて斬つてかかる。躡うてゐた虎はむつくと起きて身ぶるひし、勢子等を狙ひ猛りうなつて飛びかかり、勢子等の投附ける鉾や鎗をくはへ、岩に打當てて微塵に碎く。和藤内は安大人を擱んで投附ければ、五體ひしけて散亂した。この勢に勢子等皆恐れて降服する。和藤内は彼等の月代を剃つて結髪とし、彼等の生國などを頭字に附けて、日本流の名に改めさせ、二列に竝べて先拂をさせ、後に引馬虎斑の駒、母の供して虎に打乗り、大名行列勇ましく、足竝そろへて威風堂々、獅子が城へ向つた。

評

千里が竹の段は、縦横自在な空想を盛つて、天馬空を行くが如くである。そして波瀾萬狀な場面が、整然として次から次へと展開し、人物・背景が極めて面白く活躍し移り變る様が、巧妙に美化され詩化されて描き出されてゐる。殊に吾々は「身が生國

は「大日本」と聞かされては嬉しい。

修辭に就いて見るも、七五調・掛詞・對句法・頭韻法・脚韻法などを用ひて文を飾り、しかつめらしい故事をいふかと思へば、思ひ切つて碎ける。或は莊重典雅となつては、諧謔輕妙と轉じる。これ等のいづれもが其の上乗なものである。この事は頭註にも言及した。要するに讀者はこの段を見ても、絶世の大文豪近松の靈腕と、其の藝術の一面を味ふ事であらう。

○江戸 淨瑠璃節の一派なる江戸節をいひ、江戸半太夫の創作である。

○不知火 海路渺漫して果てしも知らぬを、筑紫の枕詞なる知らぬ火にいひかく。昔景行天皇筑紫今の肥前肥後地方に下り給うた時、海上に何とも知らぬ火の燃えるを御覽になつて、火の國と名附け給うた。これは海上の燐光であつて、知らぬ火といひ、今も俗に千燈籠といふ。「萬葉集」には皆不知火筑紫とあつて「不知火の」のし字がない。

○筑紫 昔は今の九州の總名に用ひた。

○擁護 かほひ助けて護ること。この文は、和藤内は皇妹栲羅皇女を妻小睦に托して日本に留め、自分は父母と共に明國に赴くので、神様の助け護つて下さることにより再會を願ひまし、己等を護る爲に神の吹か給へ給順風に乘じての意。この所七五調の文である。

○時も違へず 決定通り。

○親子 鄭芝龍一官と其の妻と其の子和藤内。

○鄭芝龍一官 明の忠臣。倭臣を斥くべきを言上して遊議に觸れ、日本に來つて肥前國平戸に住し、名を老一官と改め、平戸の漁夫の女を娶つて和藤内

千里が竹

別れ行船路の末も、不知火の、筑紫は雲に埋めども跡に、擁護の、神風や、千波萬波を押切つて、時も違へず親子の船、唐土の地にも著にけり、鄭芝龍一官は故郷へ歸る唐錦、裝束引替へ妻子に向ひ、我本國と云ながら時移り世變り、天下悉く李蹈天が引入れにて、鞆鞆夷の奴と成、昔の朋友一族とて誰を尋ん様もなき、司馬將軍吳三桂が生死の在處も知れざれば、何を以て義兵の旗を擧、何國を一城に楯籠るべき所もなし、然るに某去天啓五年此國を立退き、日本へ渡る時二歳に成し娘の子を、乳母が袖に捨置しが、其子が母は産落して當座に死す、

を生む。この度妻子を存つて明に渡るのである。

○故郷へ歸る唐錦 「南史」柳慶遠傳に「柳衣錦還郷。白樂天の句に「君不見買臣衣錦還郷」。この文は、鄭芝龍がその生國の明に還るのであるから、金絲絨の錦の装束に着替へる意で、著替へをしたことを飾つていうた。

○李蹈天 鞋類に内應して明帝を誅した逆臣。

○韃靼 俗に滿洲を韃靼といふ。

○司馬 戎馬の事を司る官。

○吳三桂 明の忠臣。李國天の黒謀を察し帝を諫めて納れられず。帝誅せられるや、自ら幼皇を護つて九仙山に隱る。

○天啓五年 明の熹宗皇帝の天啓五年は、我が寛永二年（一八八五年）に當る。

○娘の子 鍾祥女。

○八重の潮路 幾重も波重なる潮のさしひまのすぢ。以て遠く海を隔つこといふ。

○草木の雨露の恵に長ず 「和漢朗詠集」紀長谷雄の詩句に「葉得自爲花父母、洗來聚辨葉君臣」。諸曲「熊野」に「草木は雨露の恵み、養ひ得ては花の父母たり」。このあたりの文は、悲哀を寓して胸に柔かにせまる妙文である。

○甘輝 明の五常軍敵將軍。獅子が城主。鐘祥女の夫。

○大名 江戸時代には、幕府に直隸せる萬石以上の土地を領有せる者の通稱で、諸侯ともいふ。

○和藤内 本曲第二番傳ひの條に、「母が和國の

斯くいふ父は八重の潮路の中絶えて、何時父母も知らぬ身が育てば育つ草木の、

雨露の恵に長ずる如く、天地の父母の助にや、成人して今五常軍甘輝といふ大名、

一城の主の妻と成由商人の便に聞及ぶ、頼む方は是ばかり、親を慕ふ心有て娘さ

へ承引せば、聲の甘輝も易々と頼まるべし、これより道の程百八十里、打連れて

は人も怪しめん、我一人道を變へ和藤内は母を具し、日本の獵船の吹流されしと、

頓智を以人家に憩ひ追付べし、これより先は音に聞ゆる千里が竹とて虎の棲む大

藪有、それを過れば瀧陽の江、これ狸々の栖所、風景聳えし、高山は赤壁とて、

昔東坡が配所ぞや、それよりは甘輝が在城、獅子が城へは程もなし、其赤壁にて

和の字を用ひ、父は唐人の唐の聲をかたむつて、和藤内三官と名乗る。即ち父は唐土産れの鄭芝龍、母は日本平戸生れであるから、其の子は和藤内の義によつた名である。實傳では鄭成功であつて、國姓爺と號した人。

○これより先 作者が行くべき道を想像していふのであるから、その名の地があらうとあるまいと、想像は自由である。

○千里が竹 藤に虎は千里の藪に住むといふによつて、作者が思ひついた地名。

○瀧陽の江 今、九江と稱し、支那江西省の開港場である。この文は諸曲「狸々」に、「今日は瀧陽の江に出て、彼の狸々を待たばやぞ存じ候」とあるに據つた。

○赤壁 支那湖北省武昌府嘉魚縣の西七十里、揚子江岸にある赤壁山。蘇東坡が黃州に貶せられ赤壁に遊んで「前赤壁賦」「後赤壁賦」を作つた勝地は、湖北省黃州府城の西北漢川門外にあつて、赤鼻山ともいひ、今、東坡の祠があるといふ。

○東坡 蘇軾の號である。宋の神宗の朝、罪を得て黃州に貶された。元熙五年七月十六日夜赤壁に遊んで「前赤壁賦」を作り、同年十月十五日夜再遊して「後赤壁賦」を作る。

○配所 配流所。罪を得て流された所。

○獅子が城 獅子とは、揚子江口にあつて、吳淞（上海の北）の西北に當る獅子林をいふか。

○かひなくしく 頼もしく。「かひは價即ち價値の義。

○たつき 手書の義。「萬葉集」に「方便をよんである。たより。よるべ。

○たきつ波 たぎつ波即ち沸きあがる波、さかまく波の意。「たぎ」を「たき」と滑んでいふは後世の轉訛。「萬葉集」に「落ちたぎつ流る、木しなで見えてゐる。

○ほうど ほましく。したたか。

○くはを抜かし 「くは」は鐵であつて、氣を取られて鐵を手放す義であらう。氣抜けする。茫然自失する。近松作「生玉心中」に「嗚小辨もしろろかろ、己も鐵を抜かした」とある。「くは」を我「が」にするは非。詳しくは「近松語彙」を見よ。この所、後に活劇を演じる所も、よい對照である。

○母者人 も「母ぢや人」である。母にてある人。母をいふ。封建時代武士にも町人間にも行はれた語。

○小豆の飯の相伴 昔から狐は稻荷明神の使といひ、これに小豆飯及び油湯などを供へるので、かく言つた。「相伴」は貴人の食に陪すること、轉じて同輩にもいふ。伴食。

○根笹 竹の一種。莖は短小で高さ七八寸に達し、よく蔓延して繁茂す。

○ちやるめら 葡萄牙語 Charaneta。喇叭に似て孔が七つある。管は木、頭と尾とは銅で作る。唐人笛。現今も屋敷車の支那そば賣りが、吹いて流す値をチャルメラというてゐる。

待揃へ、萬事をしめし合すべし」と、方角とても白雲の、日影を心覺にて東西、

へこそ 別れけれ、教に任せ和藤内人家を求め忍ばんと、かひなくしく母を負たつ

きも知らぬ岩巖石、古木の根ざし瀧つ波、飛越へ跳越へ飛鳥の如く急げども、末

果しなき大明國、人里絶へて廣々たる千里が竹に迷ひ入、和藤内ほうどくはを抜

かし、なふ母じや人、此脚骨に覺え有、もう四五十里も來ませうが、人にも猿に

も逢ふ事か、行ば行く程敷の中ム、ウ合點たり、方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶ

るよな、魅さば魅せ宿なし旅の行付次第、小豆の飯の相伴」と根笹大竹押分、踏

分猶奥深く行先に、怪しや數萬の人聲攻鼓攻太鼓、喇叭ちやるめら高音を反しひ

やうく、とこそ聞えけれ、すは我々を見答めて敵の取巻く攻太鼓、又は狐のな

す業か」と茫然たる其折節、空凄じく風起り、砂を穿ちどうくく、竹葉さつ

と巻立てく吹折る、竹は劍の如く凄じなんどもおろかななり、和藤内ちつとも臆

せず「讀めたり讀めたり、扱は異國の虎狩な、彼の鉦太鼓は勢子の者、爰は聞ゆ

る千里が原、虎嘯けば風起る猛獸の所爲と覺えたり、二十四孝の楊香は孝行の徳

によつて、自然と遁れし惡虎の難、其孝行には劣るとも忠義に勇む我勇力、唐へ

○反し 吹きそらし。
○空凄じく…おろかなり 虎の出現する伏線。

○凄まじいなんでもおろかなり 凄まじいなまじいふ位では、また言ひ方が足らぬ。凄まじい以上の物すじである。「おろか」はおろそか、疎の義。鳥の意に用ひるも、疎の義から出たのである。

○讀めたり わかつた。

○せこ 實子の義。獵の時に鳥獸を驅出す夫卒。かりこ。「西都賦」に「刈卒」と書き、「廣雅集」に「東鑑」に「勢子」と書いてある。

○虎嘯けば風起る 「易」の文言に「風從虎」。古樂府に「虎嘯谷風起」。「淮南子」に「虎嘯而谷風至」。

○二十四孝 支那に於ける二十四人の孝子、即ち舜、漢文帝、曾參、閔損、仲由、董永、劊子、江革、陸績、唐大人、吳猛、王祥、郭巨、楊香、朱壽昌、陳齡、老萊子、蔡順、黃香、姜詩、王褒、丁蘭、孟宗、黃庭堅。

○楊香 支那二十四孝の一人。十四歳の時に其の父が虎に脚へられたのを、楊香奮進して虎と組み、以て父を救つたといふ。

○身繕ひ 身支度し。
○西天の獅子王 印度の獅子。「獅子王」とはライオンは百獸の王たる故にいふ。「無畏壽經」に「如獅子王無所畏故」。

○伏根 地面に這ひ伏してゐる根。

渡つて力始、神力ますく日本力刃で向ふは大人氣なし、虎はおろか象でも鬼

でも一挫ぎ」と、尻引つからげ身づくろひ母を圍ふて立たるは、西天の獅子王も、

恐れつべうぞ見えてげり、案に違はず吹風と共に荒れたる猛虎の形、伏根に面を

摩り付く岩角に爪磨立て、二人を目懸け噂かゝるを事もせず、左手に擲り右

手に受、振つて懸くれば身をかはし撓めば、ひらりと乗移り、上に成下に成命競

べ根競べ、聲を力にゑい、虎の怒毛怒聲山も崩る、如くなり、和藤内も

大童虎も半分毛をむしられ、兩方共に息疲れ石上に突立ば、虎も岩間に小首を投

げ、大息繼いだる其響、吹革吹が如くなり、母藪陰より走出、「ヤア、和藤内、

神國に生れて神より受し身體髮膚、畜類に出合力立てして怪我するな、日本の地

いがかかか、怒つてかみつく。「いがむ」とは獸の怒

つてかみつかうとるをいふ。「榛訓菜」に「いがむ」大猫などの

怒り鳴るをいへり。
○根 六根(眼耳鼻舌身意)の元氣を根といふ。轉じて、事に

堪へ忍ぶ精神の力。精力。
○大童 髪をふり亂したこをいふ。古は童は髪を結はなかつた。大童は大きな童形の義。

○補 「ふきかはし(吹革)の音便。鍛冶が火を起すに用ひる

出させて火を起す具。

○神國 「神皇正統記」に、「大日本は神國なり、天祖始めて基

を開き、日神長く神を傳へ給ふ、我が國のみ此の事あり、異朝に

は其の類なし、この故に神國といふなり」とある。

○神より受けし身體髮膚 「孝經」に「身體髮膚受之父母」。

○出合ひ 行合ひ。

○五十鈴川 伊勢大神宮の所在地を流れる川。
「居ますし」五十鈴川をいひかく。

○大神宮の御祝 「榛訓祭」はらひの條に、「伊勢のおはらひ配りは祓串を分配するなり、後陽成院の比よりの事なりといへり」。

○納受^{なうけ}などか無からんや 必らず受人れられるに相違ない。

○虎に差向け：勢も忽ち この文にはS及びTの頭韻を速にて修飾した。

○神國神祕の其の不思議 神のつくらせ給うた國の、神妙にして人に知られない其の神の威應が、不思議にも忽ちあつたごの意。

○尾筒^{おびつ} 尾のつけ根が筒形に脹れた處。

○天の斑駒素盞鳴の尊の神力 素盞鳴尊が天の斑駒を捕へて、其の皮を割ぎ給うた故事を、和藤内が虎をひしいた事に比した。この文は聯語的句法である。「斑駒」とはさし毛のある馬をいふ。「古事記」に「天照大御神坐忌服屋、而令織神御衣之時、穿其服屋之眞、逆刺天斑馬、刺、而所墮人時、天衣織女見驚、而於^レ接衝^ニ墮上^ニ而死^ス」。

○天照神の威徳ぞ有難き 虎をひしいたのは自力でなく、天照大神の御威徳である、神の恩を謝したのである。

○らぬ おのれの汝。そのはう。

○風來人 何地からともなく、風に吹寄せられたやうに來た人。浮浪人。

○しやくはん 「じやくわん」(土宮)の變じた

は離る、共神は我身に五十鈴川、大神宮の御祝納受^{なうけ}などか無からんや」と、肌のは離る、共神は我身に五十鈴川、大神宮の御祝納受^{なうけ}などか無からんや」と、肌の護符を渡さるれば「げに尤」と押戴き、虎に差向け差上ぐれば、神國神祕の其不思議猛りに猛る勢も、忽尾を伏せ耳を垂れ、じり、くと四足を縮め、恐れわな、き岩洞に隠れ入る、尾筒を擱んで跳返し、打伏せ、怯む所を乗つ懸り、足下に確と踏まへしは天の斑駒素盞鳴の、尊の神力天照神の威徳ぞ有難き、かゝる所に勢子の者群がり來る其中に、大將と思しき者大音上、ヤア、うぬは何國の風來人、我が高名を妨ぐる、其虎は、忝も主君右軍將李蹈天より、韃韃王へ獻上の爲狩出したる虎成ぞ、早々渡せ異議に及ばず撲殺さんしやくはん、くと喚きける、李蹈天と聞よりも願ふ所と笑壺に入、ヤア餓鬼も人數しほらしい事はざいたり、身が生國は大日本風來とは舌長し、さ程欲しがらる虎ならば、主君と頼む李蹈天とやら石花菜とやら、爰へ突出し詫言させい、直に逢ふて用も有、さも無ひ内はいかな事ならぬ、くと睨付る、ヤア物な言はせそ討取れ」と一度に劍をはらりと抜く、「心得たり」と護符を虎の首に掛け、母の傍に引つ据ゆれば繁さし如くに働かず、「ヲ、心安し」と太刀差斃し、群る中へ割つて入、八方無盡に

語で、軍士といふ程の意に用ひたのである。加藤清正の事を「おしやぐはん」といふのである。「おしやぐわん」は鬼上官である。詳しくは「近松語彙」を見よ。

○笑壺に入り 笑ふべき壺にはまつた意。深く笑ひ興するをいふ。

○餓鬼も人数 驅驅も鳥の内」といふ類。「故事要言」に「物の敵にもならぬものも難も、時ありては便なる事ありといふ心なり」とある。

○しほらしい も「しをらし」(美)である。いたはる意より、「かはゆらしい」(殊勝)の意にいふ。

○ほざく ぬかす。しやべる。

○身が生國は大日本 見得を切つた所痛快。

○舌長し 漢語の「長舌」から出づ。言ひ過す者を罵つていふ。註釋「大雅暎印篇」に「婦人有「長舌」、維厲之階。」

○石花菜 ところろてん草を洗ひ晒し、之を煮て滓を去り、冷して固めたもの。之を先端に金網を張つた方柱状の器に入れ、突棒で突出させ、細長い細筒状の細切となる。之に醤油・酢などをかけ、食ふ。この文は、李昭天と石花菜と音が相似てゐるので、李昭天を諷してかくいひ、又「笑出し」と石花菜の縁語である。近松は屢よかゝる諧謔輕妙の筆を用ひた。

○いかな事ならぬ どのやうな事があつても、断じて承知できない。

○な言はせそ 言はずなり「な」そは禁止の意を示す。勿れ。

國性爺合戦

割立てく撫捲くる、勢子の大將安大人官人引具し立歸り、「汝老耄餘さじ」と一文字に切り懸る、猶も神明擁護の印神力虎に加はつて、むつくと起て身ぶるひし、敵に向ひ齒を鳴し猛りうなりて飛かゝる、「こはかなはじ」と安大人勢子の者が差

いたる劔、狩鉞數鎗手に當るを幸に投付く、打かくる、虎は神力自在を得、劔を宙に引つ咬へく、岩に打當微塵になす、刃の光玉散る轂、氷を碎に異らす、

打物盡くれば官人共色めき立つて迷惑ふ、後より和藤内「どつこい遣らぬ」と顯れ出、安大人が素首を掴んで差上、くるくと振廻しゑいやつと打付れば、岩に

熟柿を打ごとく五體ひしげて失せにける、此勢に官人原跡へ戻れば惡虎の口、先へ行ば和藤内仁王立に突立たり、「ア、申御堪忍、御免く」と手を合せ土に食

○狩鉞 狩獵に用ひる鉞。(鷹取鉞の義ではない)。

○數鎗 ありふれた粗末な鎗。「數は數多くあつてありふれた物の意を示す接頭語。「世間胸算用卷四、長崎の餅柱の條に、「外に五十本づつの數鎗」とある。數鎗の數も數鎗の數も同じ語である。

○玉散る轂 又の碎け散る光は、恰も玉と散る轂の如くの意。

○打物 打撃へた物の義、刀・鎗などの武器をいふ。

○色めく 眞けるまざしの現はれる。

○素首 首を罵つていふ。「そは」を「やつ」などの「そ」と同じく「其」の義であらう。

○五體 筋脈肉骨皮毛、或は頭・兩足・兩手をいふ。轉じて全身をいふ。

○原 殿原などいふ原と同じく、一人ならぬをいふ接尾語たち。

○跡へ戻れば、和藤内 「成語考」に「前門拒虎、後門進狼」とあるに據つた翻案。

○仁王立 寺門の左右にある仁王像の如く勇猛に突立つこと。

○日本人 「日本人といひ、日本の手並」といひ、日本をたびく／＼いふこ痛快である。

○先帝 明の恩宗烈皇帝。

○梅檀皇女 前文に、皇女の乗れる船が平戸に著き、鄭芝龍は偶然之に會つて故國の亂を聞き、皇女を平戸に留め、妻子を連れて明國に渡つたことが見えてゐる。

○三世の恩 主君の恩をいふ。諺に「親子は一世、夫婦は二世、主従は三世」といふ。

○向後 今後。

○元服 男子十五六歳に達した時行ふ。少年がはじめて大人の服を着け、冠を加へて成人となる禮。この時に幼名を改めて實名を附ける。そして前髪を剃つて、髪結び方も變へたのである。

○鉢 頭蓋骨をいふ。そして月代を剃る爲髪を揉むに要する水鉢をいひかく。このあたりよりこの文の終りまで毎1妙境に入り、諸説の妙を見せて、近松の兼腕を遺憾なく揮つた。

○こぼつ 頭を傷つける。鉢の縁詰。

○絲鬘 頂を剃つて兩鬘の髪を狭く残して結つた男子の髪。好色一代男に「世の風俗も絲鬘にして」とある。

○厚鬘 頭の中央から額にかけて狭く剃り落し、兩鬘の髪を狭く残して、厚くふさ／＼と結うた男子の髪。風。

○二櫛半のはらげ髪 髪を極めて粗略にすぎ、結び、髮附油も用ひぬのだから、はらげ亂れた結び

付泣居たり、和藤内虎の背を撫でて、汝等が小國として侮る日本人、虎さへ怖がる日本の手竝覺へたか、我こそ音に聞えたる鄭芝龍老一官が悴、九州平戸に成長せし和藤内とは我事なり、先帝の妹宮梅檀皇女に廻り合、三世の恩を報せん爲、父が故郷へ立歸り國の亂を治るなり、サア命惜しくば味方に附け、否と言へば虎の餌食、否か應か」と詰かくる、ナフ何の否でござりましょ、韃靼王に従ふも李滔天に従ふも、命が惜しさ向後お前の御家來共、お情頼み奉る」と地に鼻付て畏る、ナ、出來した／＼去ながら、我家來になるからは日本流に月代剃つて元服させ、名も改めて召使はん」と、差添の小刀外さしこれも當座の早剃刀、母も手々に受取て、竝ぶ頭の鉢の水揉むや揉まずに無理無體、片端剃やらこぼつやら、絲鬘厚鬘剃刀次第、瞬く間に剃仕舞二櫛半のはらげ髪、頭は日本髭は韃靼身は唐人、互に顔を見合せて、頭冷つく風邪引で、噓、噓、村さめ／＼と涙を流すぞ道理成、親子どつと打笑ひ、揃ひも揃ふた供廻り名も日本に改めて、何左衛門何兵衛、太郎、次郎、十郎迄面々が國所、頭字に名乗り二行に立てばつ立てる、承り候」と、お先手の手振の衆ちやぐ忠左衛門、かばちや右衛門、るすん兵衛、東京

ひ振といふのである。「二橋半」は、髪をすくに二橋半しかすかないといふ極めて粗賤なすき方を示す。かく殊語(Special term)を用ひてゐるは面白い。

○村さめく 「くつさめく」むらさめく 語呂を合はせてかくいふ。そして唾や鼻汁や唾が飛出るを村雨といひ、「さめく」(瀟然の意)涙を流すにつづけた。

○二行 二列。

○ぼつ立てる 「おつたて(追立)らう」の訛。「二行に立つてぼつたてらる」をば、供廻り奴が二列に並び立つて、手振り揃へて追つ立て先拂せよとの意。

○先手 行列の先頭に立つて行く者。

○手振 大名などの行列に、その先頭に立つて、拍子揃へて大手を振り、警戒の傍ら威勢を示す者。

○ちやぐ忠左衛門 「ちやぐちやう」に忠左衛門をいひかけた。ちやぐちやうは津州をいふ。支那福建省に屬し、今の龍溪縣はその舊地。「華夷通商考」卷二に「漳州」に「チヤグチヤウ」を傍訓してある。

○かばぢや かんばぢや(Cambodia)をいふ。印度支那半島の干國で、現今は佛國の保護國である。

○るすん めん(uzon)をいふ。比律賓群島中の最大の島で、首府をマニラをいふ。今は米領となつてゐる。

○とんきん (Tonkins) 印度支那最東北の平野を占める干國で、古の交趾の地に當り、現今は佛國の保護國である。

○しやむ (Siam) 印度支那の二王國。

○ちやば ちやば(Chamba)をいふ。佛領

兵衛、しやむ太郎ちやば次郎ちやるなん四郎、ほるなん五郎うんすん六郎すん吉九郎、もうる左衛門じやが太郎兵衛、さんとめ八郎いざりす兵衛今參りのお供先、跡に引馬虎斑の駒母を、助けて孝行の名、を取口取國を取譽は、異國本朝に、踏み跨げたる鞍鎧、虎の背中に打乗つて威勢を、千里に顯せり

印度支那交趾の首府サイゴン附近の地。

○ちやるなん 印度のチャール(刹兀兒)國をきかされたものか。茶字編にちや名はこれから起つたのである。

○ほるなん この名の國はない。この音に近いのはフナンか。扶南は今の暹羅あたりにあつた昔の國名。

○うんすん 葡萄牙國から渡來したウンスンカルタの名を取つたもので、その實國名ではない。

○すん ウンスン(カルタ)のスンを取つていうたのであらう。國名としては風ひ當らぬ。

○もうる もん(Manion)をいふ。英領とされない以前の印度帝國。

○じやが じやば(Java)をいふ。マレー諸島の一で、今は

和蘭領である。其首都バタビヤの舊名ジャカタラ(Jacatra)を「太郎」にひひかけて「じやが太郎」といつた。

○さんとめ 印度東境の地(San Thomas)をいふ。

○いざりす 英國。

○今參り 新參。

○引馬 大名などの行列には、行列の後方に馬を牽き従へてゐたものである。こゝも虎斑の駒を引いてゐる。

○口取る 馬の口取る。「二」の文、「取る」を重ねて文を讀つた。

○踏み跨げたる 前の「駒」の語を受けてかくいひ、後に

「虎」の語を受けて「千里」といひ、以て和蘭内の勇姿を示し、又

遠方の異國に勇名を馳かした意にいつた。

第三 (獅子が城)

登場人物の主な者

和藤内三官(二十歳。父は老一官。母は肥前平戸の女。延平王國性命と號す)

老一官の妻(平戸の浦人の女。和藤内の母)

錦祥女(二十二歳。甘輝の妻。鄭芝龍の娘。和藤内の異母姉)

甘

官(もと明帝に仕へて大獅子が城主。十萬騎の旗頭散騎將軍)

梗概

和藤内等の親子三人は赤壁山の麓で巡り合ひ、共に連立つて獅子が城に赴く。城は要害にあつて壕を廻らし、警戒嚴重を極めてゐる。和藤内は城門外に立つて、「御城主甘輝殿に直談したい事があつて参つた。城内に入れてもらひたい」と呼ばはる。折節甘輝は不在であつたので、警固の兵どもは之を追拂はうとする。

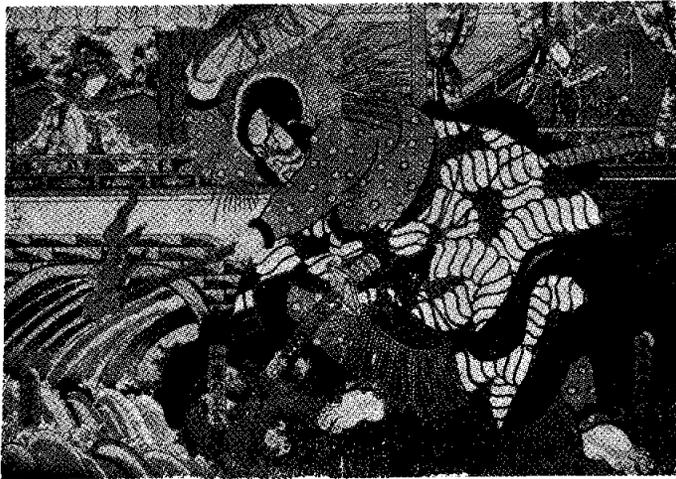
そこで老一官は小聲で、「日本から遙々参つた者だと甘輝殿の内室に傳へてくれよ。さすれば内室は合點される筈だ」といふ。奥では之を聞いて錦祥女樓門に出で、「鄭芝龍と名乗るからは、さては我が父か何用あつてござつたか」と懐しく、柄附の鏡を取出し、月影に映る父の顔を鏡の面に映し、父が故國を去る時に置いた父の姿繪と較べ、頭は白髪と變れども若い時の佛の残れるを見、抱附きたい心地して、「能う生きてゐて下さつた」とて、見下せば父は見上けて、互に二十年來逢はなかつた事とて、感極まつて涙にくれる。ありあふ者どももこの有様を見て皆涙ぐむ。されど警固の者等は、他國者は城内に入れる事堅く禁制との掟を守つて、門を開く事を承引せぬ。老一官は詮方なく妻を縛り、人質として城内に入れる事となる。錦祥女約して、「何の御所望か存せねども、叶へられれば白粉を溶いて城外の壕へ流しませう。叶へられねば紅粉を流しませう」といふ。かくて錦祥女は老母を奥に引見していたはる。

やがて甘輝歸り、韃韃王から御加増にあつかり、十萬騎の旗頭散騎將軍に任せられた」と語つて喜ぶ。妻「嬉しい事は重なるもの。今日は日本から父上が門外までござつたが、國の掟を憚り入れ申さないで、母上だけを人質としてお留め申しました」と

語つて喜ぶ。甘輝「然らば母上にお目に懸らう」とて、老母と會見する。

老母は明朝恢復の志を告げて助勢を頼む。甘輝はかねて和藤内の剛勇を聞いてゐるたが、それが我が妻の異母弟であると知つて驚き、「鄭芝龍の御味方となります」とて、妻を引寄せて刺殺さうとする。老母は飛附いて之を遮り、「何が氣に入らぬか。母の目の前で娘を殺さうとする無法人、日頃娘をいぢめてゐる事が思ひ遣られる。もう味方は頼まぬ。これ娘、親が居るから氣遣ひすな」とて、身を捨てて娘を庇ふ。

甘輝「無法人と言はれては我が意中を申さねばならぬ。實は韃韃王に呼ばれて非常なもてなしにあひ、和藤内を討滅す事を仰付けられて歸つた次第。然し母上や妻の詞を聞いて心を翻し、大義に歸して御味方にならうとは決心したれど、妻の縁に引かされて武道を捨て、敵に附いたとの世の譏を憚り、妻を殺せば其の譏もないと思つての事。これ妻よ、母のお慈悲はさることながら、お前を刺さうとする夫の劔には忠孝が籠る。義の爲に命を捨てよ、あはれの者や」といふ。錦祥女は之を聞いて覺悟し、夫の手にかからうとする。老母は「錦祥女が死んでは妾も生きては居ぬ」とてもがく。斯うなつては甘輝も手の下しやうなく、已むを得ないで老母の請を斥けた。是に於て錦祥女は約束に従つて紅を襟に流す。



甘輝(市川海老蔵) 國性爺合戦 藤内(八世市川團十郎) 三世豊國(坂東女) 畫

和藤内は蓑を被き、城外の岸頭に座を占めて壕の水を凝視し、紅の水が流れるので、さては甘輝めが味方をせぬ知らせ。この上は片時も母を預けられぬ」とて、急いで城内に乗り入り、甘輝に對面して、「天地間に唯一人の母に繩掛けたも、汝を味方に頼まうとの念願であつた。親族の好みからも其方から従ふべきだ。さあ返答せよ」と、刀の柄に手を掛けて詰寄る。甘輝「女房の縁というてはなほ従はれぬ。さつさと日本へ歸れ」とて、將に斬合ひにならうとする。

錦祥女「暫くお待ち」と聲を掛け、「今流れた紅の水の源を御覽せよ」とて、胸を押開けば鮮血に染まつてゐる。錦祥女の心は既に夫の言を聞いて死を決してゐたので、自ら懐劍で自害し、その血汐を壕に注いだのが、水を紅に染めて流れ出たのであつた。そして蟲の息をつぎながら、義によつて甘輝を説いた。甘輝は妻の爲に泣いて、直ちに和藤内の味方となる。

そこで和藤内は大將軍となり、諸侯に準へて延平王國性爺と號し、装束改め威儀を整へ、甘輝の軍十萬騎を従へる。老母は之を見て大いに喜び、娘あれを見よ。これで親子の本望を達した。この上生きては初めの詞が嘘となる」とて、錦祥女の匕首を取つて我が咽喉を刺す。かくて兩女は笑顔を娑婆の形見にて、一度に息を引取つた。國性爺と甘輝とは涙にくれて、母親と妻との臨終を見守り、韃靼王を目して母親と妻との仇敵となし、之を滅すを誓ふ。

兩女の亡骸を葬る野邊送りと、出陣の首途と取りまぜて、あはれを見する娑婆の世よ。戦へば必ず勝ち、攻めれば必ず取る名將の、それは大和女の腹から生れた國性爺が、明朝恢復を志して、驚天動地の活躍はこれから始まる。

評

この段は、妙齡な錦祥女が身を殺して、忠孝の道を全うし、和藤内が母子の情と、甘輝の苦衷とが之に絡み、興味の中心となつて、人の胸を打つ。そして姉の死によつて、剛勇な和藤内が明朝恢復の旗擧げとなり、これに關聯する人々の心持や動作が夫に、美しい背景の中に流れては波瀾を立てる。この一篇を見ても、近松の旺盛な聯想力・想像力が認められるであらう。且つ舞臺面の紋景にも、美化力・詩化力の非凡な事がうかがはれるであらう。

第三

- 仁ある君も：愛する事能はず。「文選」卷十九、曹植求自試表に「慈父不能愛無徒之子、仁君不能善無用之臣」。この文は、以て用ある臣を養ふべく、益ある子を愛すべき意にうた。
- 道の巷 道路の分岐處、人間の踐むべき道徳の、道によつて多少變化あることををいひかく。
- 親子三人 鄭芝龍と其の妾及び其の子和藤内。
- 要害 敵を防ぐに便宜な處。「俗語録」に「在我爲要、於敵爲要害也」。
- 沅え返る 餘寒厳しい。
- 繩を引くが如く 流水細長くつづきめぐるを形容していふ。
- 黄河 渤海灣に注ぐ支那第二の大河である。
- 銅鑼 からかねで作り、銅盤の形をしたもので、ほちで打鳴す樂器。
- 矢狹間 城の濠又はひめ濠などに設けた窓で、矢丸を放ち又は外を窺見する爲のもの。
- 弩 古代の武器。石を彈く機械で、日本の支那のとは其の構造異なる。
- 石火矢 石をうち出す昔の大砲。「和漢三才圖會」に「凡砲石之玉、自四五百目至四五萬目、以機巧放出、謂之石火矢也」。
- 一身の外味方なし 真に頼みになる者は我が身のみ。諺に「一心に味方なし」。

國性爺合戦

仁ある君も用なき臣は養ふ事能はず、慈ある父も益なき子は愛する事能はず、大和唐土様々に道の巷は別れるれど、迷はで急ぐ誠の道赤壁山の麓にて、親子三人巡り合ひ、我智とばかり聞及ぶ、五常軍甘輝が館城獅子が城にぞ著にける、聞しに優る要害はまだ沅え返る春の夜の、霜に閃めく軒の瓦、鯨銓天に鱗振りて石壘高く築上たり、堀の水藍に似て繩を引くが如く、末は黄河に流れ入樓門堅く鎖り、城内には夜廻りの銅鑼の聲喧びすく、矢狹間に弩隙間なく、所々に石火矢を仕掛け置すはといはゞ、打放さん其勢和國に、目馴れぬ要害なり、一官案に相違し「亂世といひ、斯かる厳しき城門事々しく、夜中に叩き聞も馴れぬ舅が、日本より來りしなんと言ふ共誠と思ひ取次者も有まじ、假令娘が聞たり共二歳で別れ、日本へ渡りし父と如何成證據を語る共、容易く城内へ入れん事難かるべし如何がは、せん」とぞ私語ける、和藤内聞もあへず、今更驚く事ならず一身の外味方なし

○不肖の身 常人に肖(に)ぬおろかな身の義。轉じて自身の意にいふ。

○人を懷け從へ 軍法の元「淮南子」兵略訓に「衆之所助、雖弱必強」なりある。

○治め しづめ。おちつけ。

○推參 おしてまゐる義。轉じて無禮の意にいふ。

○御臺所 貴人の内室の敬稱。御臺所は御臺所を略した語。内室は兼經所で食物の世話する意より稱した語である。

○鏡鉞 鑿銅(さきり)で作り、一枚打合はせて鳴す樂器。今は専ら寺院で用ひる。

○石火矢 (既出)

○火繩 槍肌又は竹幹の肉を叩き碎き、或は木綿糸を捻つて繩を作り、これに硝石を吸收せしめたもので、火を點じて置いて、火繩筒(烏銃)などの火に用ひる。

○ひしめく ひし〜と音する義。押合ひ騒ぎ立てる。

○妻の女房 妻の婦婢女といふをかくいうた。

で日本の繼母が嫉なりと言はれんは、我恥ばかりか日本の國の恥、御身不肖の、身を以て韃靼の大敵を攻破り、大明の御代にかへさんと大義を思ひ立からは、私の恥を棄我身の無念を堪忍し、人を懷け從へ一人の雜兵も、味方に招き入るこそ、軍法の元と聞、まして聲の甘輝は一城の主、一方の大將是を味方に頼む事大方にてなるべきか心を治め案内せよ」と制すれば、和藤内門外に大音上、五常軍甘輝公直談申度事有、開門〜と叩きは、城中響くばかりなり、當番の兵士聲々に、「主君甘輝公は大王の召によつて、昨日より出仕有何時御歸りも計られず、御留守といひ夜中といひ、何者なれば直談とは推參至極、言ふ事あらばそれから申せ、御歸りの節披露して取らずべし」とぞ呼ばりける、一官小聲になり、「否人傳に申事ならず、甘輝公の留守ならば御内室の女性へ直に逢ふて申べし、日本より渡りし者と申せば合點の有筈」と、言ひも果てぬに城中騒ぎ、「我々さへ面も拜まぬ御臺所、對面せんとは不敵者殊に日本人とや、油斷するな」と高提燈・銅鑼・鏡鉞を打立〜、塀の上には數多の兵鐵砲の筒先揃へ、石火矢放して打みしやげ、火繩よ玉よ」と轟きける、奥へ斯くとや聞えけん妻の女房樓門に駈上り、

○心許無き おぼつかなさ。

○朧月 顔もおぼろを朧月にいひかく。「曇る」も縁語。

○逆鱗 帝王の怒。帝王を諫めて怒に觸れる事をいふ。「韓非子」説難篇に、「大龍之虜虫也、柔可弭而勝也、然其喉下有逆鱗徑尺、若人有嬰之者則必殺人、人主亦有逆鱗、說者能無嬰人主之逆鱗一則幾矣」。

○たべ たまへ。

○胡亂 怪しく疑はしいこと。この語は本邦人が廣東地方に渡航してゐた時、傳へたのが廣まつたものであらう。

「ア、騒ぐな騒ぐな、聞届て自らがそれよと聲を掛くる迄、鐵砲放すな粗忽すな、ナフ〜門外の人々、五常軍甘輝が妻錦祥女とは我事、天下悉 韃靼の大王に靡き、世に從ふ我夫も大王の幕下に屬し、此城を預り守り嚴しき折も折、夫の留守の女房に逢はんとは心得ずさりながら、日本とあれば懐かし身の上を語られよ、聞かまほしや」といふ中にも若や我親か、何故尋給ふぞと心もとなさ危さに、懐かしさも先立て「兵共粗相すな、むさと鐵砲放すな」と心遣ひぞ道理なる、一官も初て見る娘の顔も朧月、涙に曇る聲を上、「粗忽の申事ながら、御身の父は大明の鄭芝龍、母は當座に空しく成父は逆鱗蒙り、日本へ身退く其時は二歳にて、親子名残の憂き別れ辨へなくとも乳人が噂、物語にも聞つらん我こそ父の鄭芝龍、日本肥前の國平戸の浦に年を経て、今の名は老一官、日本で設けし弟は此男、是成は今の母、密に語り、頼度事有て、成果てし此姿恥を包ます來りしぞ、門を開かせたべかし」としみじみ口説く詞の末、思ひ當りて錦祥女扱は父かと飛下りて、繼り附きたや顔見たや心は干々に亂るれど、さすが一城の主甘輝が妻、下々の見る所涙を押へて「一々覺え有事ながら、證據なくては胡亂なり自らが父といふ、

○曲者 怪しい者。磯頭屋本「節用集」に「怪物く
せもの」。

○勾欄 らんかんの先端がまがりはねてゐるによ
つて勾欄といふ。これを普通に高欄とも書く。

○柄附の鏡 金屬製の圓い鏡であつて、それに
柄が附いてゐるもの。「假名手本出臣藏第七段」に
お經が延鏡に映す著想はこれより得たものである。
實際は鏡に映して見るよりも、直接目で見た方がよ
く見えるのであるが、そこは面白くいうたもので、
いかにも優美な場面である。

○翠の鬢 黒くして光澤ある鬢髪。
◇この文は、父の若き時の姿繪と、その老いた今
の姿とを較べて、子が親に對する無量の感傷を見
せた妙文である。

證據あらば聞かまほし」と、言ふより兵口々に「證據〜、證據を出せ〜」「ハ

テ親子といふより別に變つた證據もなし」、「そりや曲者よ」と鐵砲の筒先、一度
にはらりと突懸くる和藤内駈け隔て、「無用の鐵砲ぼんともいはずば撫切にしてく

れん」、「イヤ其奴め共に遁すな」と火蓋を切て取圍み、「證據〜」と責かけて既
に危く見えけるが、「一官兩手を上て」「ア、是々、證據は其方に有筈、一歳唐土を

立退く時、成人の後形見にせよと我形を繪に寫し、乳人に預け置つるが、老の姿
は變る共面影殘る繪に合せ、疑ひを晴れ給へ」「なふ其詞が早證據」と、肌に離

さぬ姿繪を勾欄に押開き、柄附の鏡取出し月に映るふ父の顔、鏡の面に近々と寫
し取て引比べ、引合せて能く〜見れば繪に留めしは、古の、顔も艶有翠の鬢鏡

は今の老鬢れ、頭の雪と變れども變らで殘る面影の、目元口元其儘に我影にさも
似たり、父方譲りの額の黒子親子の印疑なし、扱は誠の父上か、なふ懐かしや

戀しや母は冥途の苔の下、日本とやらんに父上有とばかりにて、便を聞かん知邊
もなく東の果と聞くからに、明れば朝日を父ぞと拜み、暮れば世界の圖を開きは

は唐土是は日本、父は爰にましますよと繪圖では近い様なれど、三千里の彼方と

○思ひ絶え 思ひきり。断念し。「萬葉集」卷十五に「旅なれば思ひ絶えてもありつれど、家にあるいもし思ひがなしも。」

○見上ぐれば見下して 父が見上ぐれば娘は見下して。

◎歸去來々々びんくはんたさつぶおんぶおん 「歸去來」は陶潜の文に有名な「歸去來辭」といふがあるから、その歸去來を取つて、いざ歸れの意にうたつた「びんくはん」は「くわんおん」觀音、「ださつ」は「だつた」(薩埵)を轉倒して配り、それに鐵砲の音ぶおん／＼を添へて、唐音詞らしくいうたまで、意味をなす例の證據の筆である。
○浮世の情 世間の人情。世渡りにはお互に思ひやりの心があるべきこの意。

や此世の對面思ひ絶え、若しや冥途で逢ふ事もと死なぬ先から來世を待、歎き暮し泣明し二十年の夜晝は、我身さへ辛かりし能ふ生きて居て下さつて、父を拜む有難や」と聲も惜まぬ嬉し泣、一官は咽せ返り樓門に縋り附、見上ぐれば見下して、心餘りて詞なく盡きぬ、涙ぞ哀なる、武勇に逸る和藤内母諸共に伏沈めば、心なき兵も零す涙に鐵砲の火網も濕るばかりなり、や、有て一官「我々これへ來る事、聲の甘輝を密に頼度一大事、先々御身に語るべし門開かせて城内へ入てたべ」、「なふ仰なくとも是へと申答なれども、此國未だ軍半、韃靼王の掟にて親類縁者たりとも、他國者は城内へ堅く禁制との掟なり、され共是は格別こりや兵共、如何せん」と有ければ料簡もなき唐人共、「否々思ひも寄らぬ事ならぬならぬ、歸去來々々、びんくはんたさつ、ぶおん／＼」と又鐵砲を差向かへば人々案に相違して呆れ果て見えけるが、母進み出一尤々、大王より掟とあれば力なし去ながら、年寄つた此母に何の用心入べきぞ、あの姫に只一言物語するばかり、妾一人通してたべ誠浮世の情ぞ」と、手を合せても聞入す「否々、女とて宥免せよとの仰はなし、然らば我々料簡して城内に有中は、繩を掛けて縛り置繩附にし

○左右 しろせ。おもしろ。「傍調業に、さうし俗に消息をさうといふは左右の音也、禁歌抄に不レ及左右に見え、物にさうなくなら見えたり。」

○白妙 鶴たしへの布の色白ければ名づけ、轉じて白色をいふ。
○韓 紅 韓から渡來した紅をいひ、轉じて麗しい深紅色をいふ。

○菩提門 菩提とは、不生不滅な眞如の理を證悟し、佛道の至極に到達すること、即ち佛果のこと。又煩惱に惑ひ三界の迷苦にあつて、眞如の理を如實に知ること能はざるを無明といふ。この文は「生死の境といへるを受けて、願望成就を菩提にかけて「菩提門」といひ、願望が破れるを無明にかけて「無明門」といふ。

○てうど ちやう(丁)である。かちんぞ。見索引)

○大手の門 城の表門。大手は追手の義で、綱手に對する語。

○結ぶ餘りの縛繩 縛られたのは親子膝つき合はせての對面ができぬ故、その對面したさに縛繩にかかつたのであるから斯ういうた。

○雪の梅 義母子芳佳しい會合で、話に花を咲かせることを、雪の梅に譬ふ。

○鶯 梅さいうたから鶯さういひ、以て鶯の美聲を義母子の話ふなつかしい聲に譬ふ。

○通事 通譯。

○十惡 殺生・偷盜・邪淫(以上身業)、妄語・綺語・惡口・兩舌(以上口業)、貪欲・瞋恚・愚癡(以上意業)。

て流すべし川水白く流るゝは、目出度き印と思召勇んで城へ入給へ、又御願ひ叶はずば紅を溶いて流すべし、川水赤く流るゝは叶はぬ左右と思召、母御前を受取に門外迄出給へ、善惡二つは白妙と韓紅の川水に、心を付けて御覽せよさらば、さらば」と夕月に、門の戸さつと押開き伴ふ母は生死の境、菩提門を引替へて是は浮世の無明門、貫の木でてうど下す音、錦祥女は目も眩れて弱きは唐土女の風、和藤内も一官も、泣かぬが日本武士の風、大手の門の閉明に石火矢打は鞆鞆風、一つに響く石火矢の音に、聞さへ遙か成、夢も通はぬ、唐土に通へば、通ふ親子の縁、恩愛の綱結び合、結ぶ餘りの縛り繩かゝる例は異國にも、稀に咲出す雪の梅、色音は同じ鶯の、聲にぞ通事いらざりし、錦祥女は孝行深く、母を奥の一間に移し二重の褥三重の蒲團、山海の珍菓名酒を以て、重んじもてなす有様は、天上の榮華とも又高手小手の縛めは十惡五逆の科人とも見る目いぶせく痛はしく、様様に宮仕へ誠の母と勞りし、心の内こそ殊勝なれ、腰元の侍女共寄集り、何と日本の子見てか、目も鼻も變らぬが可笑しい髪結び様、變つた衣裳の縫様若い女子もあれであらふ、裾も襷もほら〜ほら〜と、ばつと風が吹たら太股まで

○五逆 佛教で説ける五つの大逆罪、即ち殺父、殺母、害阿羅漢、破三和合僧、出佛身血、

○宮仕へ 宮中に仕へ奉ることをいひ、轉じて尊者に仕へることをいふ。(見索引)

○とても 助詞の「とても」に「もの添はつた語。何ととても。

○日本は大きに和らぐ大和の國 日本を大和と書く初めは、天平勝寶四年であるといふ。之を大きに和らぐ義にとつたことは、「國號考」にも其の説が擧げてある。

○成さぬ中 まま親子の間柄をいふ。「なす」は成で生む義。

○何れも頼む お前方これもに頼んで置く。

○如在 どんざい、存在と等しく、ありの儘といふこと。丁寧にせぬ義であらう。ぬかり。ておち

○龍眼肉 龍眼は熱帯地方に産する植物の名。其の果實は圓形で、中に枇杷のやうな種子があつて肉に包まれてゐる。その肉は食用となり龍眼肉といふ。

○濃焼 肉類を煮つめた味噌汁。

○濃焼 獸魚の類を鹽漬の鹽を焼く釜の下で蒸焼にしたもの。

○相撲取を結と申す 組み合ふを結ぶといひ、また相撲にて鬮脇の次位小結といふもあれば、かくいうた。

○切物 品切れ。

見えそふな、ア、恥しい事じややまいか、「否々とても女子に生れるなら、こち

や日本の女子に成たい、何故と言や、日本は大きに和らぐ大和の國と言ふげな、

何と女子の爲には、大きに和らかなは好もしい國じや無ひかいの、「ホウ有難い

國じやの」と、目を細めてぞ領さける、錦祥女立出「是々面白そうに何言ふぞ、

彼方は自らとは成さぬ中の母上なれば、孝行といひ義理といひ、誠の母より重け

れ共、國の掟詮方なく縛り搦めるおいとしさ、韃靼王へ漏れ聞え良人に咎めあら

ふかと、宥免も成難く難儀といふは我身一つ、何れも頼む食物も違ふとや、お口

に合ふ物何ふて、進せてくれよ」と宣へば、「いや如在もなふお料理も念入、龍眼

肉のお食、お汁は家鴨の油揚豚の濃漿・羊の濱焼、牛の蒲鉾様々にして上げて、

なふ忌々しいそんな物嫌々、縛られて手も叶わぬ、つる握飯をしてくれと御意な

さるゝ、其握飯といふ食ひ物は何の事やらどうも合點參らず、皆打寄つて詮議致

せば、日本では相撲取を結と申げな、それ故方々尋ても、折しも悪ふお齒に合ひ

そな相撲取が、切物成」とぞ申ける、表に轟く馬車「御歸館」と呼ばはつて、唐

○唐櫛 脚あつて唐風に作つた櫛をいひ、衣服調整及び種々 髪物を入れる。

○衣笠 絹傘の義。絹張の長柄の傘をいひ、貴人に後方からさしかざし、威儀の用のもの。

○物體 物々しい體底。

○えいりよ 敬威に「えいりよ」と傍訓してある。「えいりよ」は敬威である。「敬」は明又は通の義。通明な知識といふことで、天子の御事についていふ。

○散騎 魏晉時代の散騎常侍は、政治に參與した顯職であつたが、清では地位卑き散騎郎といふがあるのみ。

○母上繩掛けし御心底悲しさよ 母上に父老一官が繩を掛けた、親の御心底を察して我は悲しうござらぬ。

○妻戸 端月の義。屋内の隅にあつて、板で造り兩開きの細戸。

○優曇華のまれ人 印度傳説での植物。三千年に一度、金輪聖王のあらはれる時に花が咲くといふ。以て稀なことにいひ、客人へまれびとにつづけた。「法華文句」に「優曇華者、此云靈瑞、三千年一現、現則靈瑞王出」。

櫃先に昇入させ悠々たる衣笠も、流石五常軍甘輝と名に負ふ其物體、錦祥女出迎ひ「何とて早起御退出御前は何と候ぞや」、「さればく、韃靼大王歡感深く過分の御加増、十萬騎の旗頭、散騎將軍の官に任せられ、諸侯王の冠裝束給はり大役仰付らるゝ、家の面目是に過す」と有ければ、「それはお手柄目度いゝ、なふ家の吉事は重なる物、日来戀しい床しいと申暮せし父上、日本にて設け給ひし母兄弟頼み度事有とて、門外迄來り給へ共お留守といひ、嚴しき國の掟を憚り、男子は皆歸し母上ばかりを留置しが、猶も上の聞えを恐れ繩を掛けてあれ彼の、奥の亭にて御馳走は申せ共、胎内借らぬ母上繩掛けし御心底、悲しさよ」とぞ語りける。ムム繩掛けしとは好い料簡、上へ聞えて言譯有、随分もてなせいざ先我も對面せん、案内申せ」といふ聲の漏れ聞えてや、妻戸の内、なふ錦祥女、甘輝殿のお歸りか爰は餘り高上り、妾それへ」と立出る形はいとゞ老木の松の、縮榻まれし藤葛起居、苦しき其風情、甘輝見る目も痛はしく、「誠世の中の子といふ者のあればこそ、山川萬里を越給ふその甲斐もなき縛めは、時代の掟是非もなし、それ女房お手が痛むか氣を付よ、優曇華の客人聊か疎略を存せず、何事成共此甘輝

○松浦が磯 松浦郡松浦郡の磯。

○姫宮 皇妹梅禮皇女。

が身に相應の事ならば、必かならず心置おかるな」とよに睦むつじくもてなせば、老母おんはは顔色打解とけて「ヲ、頼たのもしい、忝かたげない、其詞ことばを聞きからは何なにしに心置おべきぞ、頼たの入り度な大事密じに語かたり申またし是これへ、く」と小聲こゑに成なりなふ我々われわれ此度このたび唐土たうとへ渡わたりし事こと娘むすめゆかしいばかりでなし、去年こぞの初冬はつふゆ肥前ひぜんの國くに松浦まつらが磯いそといふ所ところへ、大明たいめいの帝ていの御妹おんいもうめ梅禮めいれい檀皇だんかう女によ小船せうせんに召めされ吹流ふいりゅうされ、御代みよを韃靼たつたんに奪うばはれし御物語おんものごと聞きと等ひとしく、父ちちは元もとより明朝みんてうの廢臣はいしん、我子わがこの和藤内わとうないと申まうす者もの、賤いやしき海士あまの手業てわざながら、唐土たうと日本の軍書ぐんしよを學まなび韃靼たつたん大王たいおうを滅ほろぼし昔むかしの御代みよに翻ひるがへし、姫宮めいみやを帝位ていゐに即つくと先日本まきよに残のこし置おき、親子おやこ三人さんにん此唐土このこへは來きたれども、淺あましや草木さくもくまでも皆みな韃靼たつたんに隨したがひ靡なび、大明たいめいの味方みかたに心こゝろざす者もの一人ひとりも候まをはず、和藤内わとうないが片腕かたうでの味方みかたに頼たのむは甘輝殿かんきでん、力ちからを添そへて下くだされかし偏ひとへに頼たのみ參まゐらする、是これが拜おがむ心こゝろぞ」と額ひたひを膝ひざに押おし下くだげ押おし下くだげ、只ただ一筋ひとすぢの心こゝろざし思おもひ、込こふでぞ見みえにける、甘輝かんき大きおほきに驚おどろこムウ、扱あは聞き及およぶ日本よめの和藤内わとうないと申まうすは、此錦祥女きんしやうによとは姉弟あなご鄭芝龍ていしけん一官いっくわんの子息しそく候まをな、ム、武勇ぶゆうの程ほど唐土たうと土迄こゝも隠かくれなく、頼たのもしき思おもひ立たち尤なほ斯あうこそ有あるべけれ、我等われらも先祖せんぞは大明たいめいの臣しん下くだ、帝亡ていぼうび給たまひてより頼たのむべき主君しゅくんなく、韃靼たつたんの恩賞おんじやう蒙まうり月日つきひを送おくる折柄せつがら望のぞむ

○口より出せば世間 口から出して語れば、もはや秘密は破れて、世間に知れる事となるこの意の語。

○不覺（既出）

○劍引抜いて咽喉に差當つる 甘輝が妻を殺して錦之形の將となりし事は、蓋し吳起が妻を殺して魯の將となつたことに暗示（ヒント）を得たものであらう。近松は「池狩劍本地」に「吳起が妻を皆せしも明者の道を重んずべき道こかや」と書いてゐる。

○昔中 背後。

所の御頼み、早速味方と申度が少存る旨あれば、急にあつ共申されず篤と思案しお返事を」と、言はせも果す「ア、ウそりや御卑怯な詞が違ふ、是程の一大事口より出せば世間ぞや、思案の間に漏れ聞えて不覺を取悔んでも返らず、お恨とは思ふまじ成れ成らざれお返事を、サア只今」と責つければ、「ムウ急に返答聞度くば易い事、如何にも五常軍甘輝和藤内が味方なり」と、言ふより早く錦祥女が胸元取て引寄せ、劍引抜いて咽喉に差當つる、老母慌て、飛か、り二人が中へ割つて入、持たる手を踏放し娘を背中を押遣り、仰向に重なり臥し大聲上て、
 「是情なや何事ぞ人に物を頼まれては、女房を刺殺すが唐土の習ひか、心に染まぬ無心を聞も、女房に縁有故と心腹が立ての事か、但は狂氣かたま、初て来て見たる、母親の目の前で殺そうとする無法人、日比が思ひやられた味方をせずばせぬ迄よ、今迄と違ふて親の有大事の娘、これ怖い事はない、母に確と取附きや」と、隔ての垣と身を捨て圍ひ歎けば錦祥女、夫の心は知らねども母の情有難さ、「怪我遊ばすな」とばかりにて共に、涙に咽びけり、甘輝飛退つて「ヲ、御不審御尤、全く某無法にあらず狂氣にも候はず、昨日韃靼王より某を召し、此比

○似非者（にせもの） くせもの。

○せうばく 原本「小乏せうばく」に「こ」ある。乏小「輕少の」假言集覽に「乏少」乏は吳音ボフなれども轉音にてボクと呼べり。

○楠木 吉野朝の忠臣楠木正成。

○肝膽 出で 智能を出し。

○朝比奈 朝比奈三郎義秀をいひ、源頼朝の勇將。

○辨慶 武藏坊辨慶をいひ、源義經の臣で、勇力を以て聞ゆ。

○孔明 諸葛亮孔明は支那三國時代琅陽郡の人、軍略に長じ、蜀の昭烈帝に仕へて丞相となり、武侯侯に封せられた。嘗て後主に奉つた前後の「出師表」は人のよく知る所である。

○樊噲 漢高祖の臣。もこ狗を屠るを業とした者で剛勇である。高祖が楚の項羽と論門に會した時、樊噲魯外にあつて高祖の怒を聞き、突入して高祖を救つた。

○項羽 楚の將。剛勇を以て聞ゆ。秦を滅して阿房宮を燒く。後に漢の沛公と戦つて死す。この所の文意は、古の名將孔明の魂膽に分入つて其の魂膽となり、又昔の勇者樊噲・項羽の骨身を借りて其心底さなりの意、即ち孔明の智、樊噲・項羽の勇を我が身に保持しといふのである。
○ぬくぬく 温々の義。うま〜。づら〜しう。

日本より和藤内といふ似非者、小乏下劣の身を以て智謀軍術選しく、韃靼王を傾け大明の世に翻さんと此土に渡る、彼が討手誰ならんと數千人の諸侯の中より、此甘輝を選出され散騎將軍の官に任じ、十萬騎の大將を賜はる、和藤内を我妻の姉弟と今聞迄は夢にも知らず、彼奴日本に傳へ聞く楠木とやらんが肝膽を出、朝比奈・辨慶とやらんが勇力有共、我又孔明が腸に分入、樊噲・項羽が骨髓を借つて一戦に追て追まくり、和藤内が月代首提げて來らんと、廣言吐きし某が、一太刀も合せず矢の一本も放さず、ぬくぬくと味方せば五常軍甘輝が日本の武勇に、聞怖ちする者でなし、女に絆され縁に引かれ腰が抜けて弓矢の義を忘れしと、韃靼人の雑口かけられんは必定、然れば子孫末孫の恥辱遁れ難し、恩愛不便の妻を害し女の縁に引かれざる、義信の二字を額に當さつぱりと、味方せん爲、ヤイ錦祥女、留むる母の詞には慈悲心籠る、殺す夫の劍の先には忠孝籠る、親の慈悲と忠孝に命を捨よ女房」と、理非を飾らぬ勇士の詞、ヲ、聞分けた身に適ふたり胸押開くれば引寄せて、見る目危き氷の劍「なふ悲しや」と駈け隔て、押分け

○唐猫 猫はもと韓國からくじより渡來したも
のなるよりいふ。

○娑婆 梵語のSaha、堪忍または忍土と譯し、現
世をいふ。

○残り 自分を除いた残り。この所の文は、義理
と恩養と人情の極致を盡した。

○邪見 邪険とも亦く。無慈悲の、憐むじく險惡
なこころ。

○五常 「白虎通」に「五常者何、謂仁義禮智信
也」。

んにも詮方なく退けんとするに手は叶はず、娘の袖に食附て引退くれば夫が寄る、
夫の袖を唾へて引けば、娘は死なんと又立寄るを口に唾へて唐猫の、時を換ゆる
如くにて母は目もくれ身も疲れ、わつとばかりにどうど伏し前後、不覺に見へけ
れば、錦祥女縋り付「一生に親知らず、終に一度の孝行なく何で恩を送らふぞ、
死なせてたべ母上」と口説き歎けばわつと泣、なふ悲しい事いふ人や、殊に御身
は娑婆と冥途に親三人、残り二人の父母は産落した大恩あり、中に一人の此母は
憐れみかけず恩もなく、うたてや繼母の名は削ても削られず、今爰で死なせて
は、日本の繼母が三千里隔てたる、唐土の繼子を憎んで見殺しに殺せしと、我身
の恥ばかりかは普く口々に日本人は邪見なりと、國の名を引出すは我日本の恥ぞ
かし、唐を照す日影も日本を照す日影も、光に二つは無けれ共、日の本とは日の
初仁義五常情あり、慈悲専らの神國に生を受た此母が、娘殺すを見物し、そも生
きて居られふか、願くは此繩が日本の神々の注連繩と顯はれ、我を今絞殺し屍は
異國に曝す共、魂は日本に導き給へ」と聲を上、道もあり情もあり哀も籠る口説
き泣、錦祥女は縋り附く母の袂の諸涙、甘輝も道理に至極してそゞる涙にくれけ

○韓錦 こは血の涙の色にいうた。そして「錦」から「錦祥女」と錦の訓と音をもつてつづけた。
(見索引)

○瑠璃 七寶の一、青色の玉の類。

○渡らぬ錦中絶ゆる 「古今集」秋下部の歌、「たつた川紅葉亂れて流るめり、渡らは錦なかや絶えなむ」の中の句を改めて用ひた。そして親子の縁の中絶する意にいうた。

○漣つ瀬 たぎつ瀬の意。ここの文は、紅葉葉がたかり落つる川瀬を寒くせきながら流れ下るといふこと、浮世の秋の物悲しさに、親子誤合の折合ひがつかずし、悲しい物思ひに流る別れをする意とを合はせていふ。

○うたかた 「うつかた」(空形)の轉か。泡沫、水海。

○くぐる 「くぐる」(指)の誤。絞り染する。「古今集卷五、秋下部の歌に、「ちはやぶる神代もきかす立田川、からくれなゐに水くくるとは」。

○南無三寶 佛法僧の三寶を呼んで加護を祈る意より出で、失敗した時にいふおしまつた。残念。

○早瀬川 足の早いを、川瀬の早いにいひかけてかいうた。

○はたかる 「はたかる」ともいふ。開張の義。手足をひろげる。「榛調菜」に「大手をはたけなごいへるは開く義なり」。近松作「冥途の飛脚」に「立ちばたかつてわめさける」。

○わぬし 吾が主の義。同等の者にいふ對稱代名詞。お前さん。

るが、や、有て甘輝席を打て、ハツア是非もなし力なし、母の承引なき上は今日より和藤内とは敵對、老母を是に留め置、人質と思はれんも本意ならず、輿車用意して所を尋送り返し參らせよ、「いや送る迄もなく、此遣水より黄河迄よき便には白粉流し、叶はぬ知らせは紅粉を流す約束にて、迎ひにお出有筈いで紅粉溶いて流さん」と常の一間に入にけり、母は思ひに、かきくれて、思ふに違ふ世のながを立歸りて夫や子に、何と語聞かせんと思ひやる方涙の色、紅粉より先の韓錦、錦祥女は其隙に瑠璃の鉢に紅粉溶き入、是ぞ親と子が渡らぬ錦中絶ゆる、名残は今ぞ」と夕波の泉水にさらさら、落ち瀧つ瀬の紅葉葉と浮世の秋をせき下し、共に染めたる泡沫も紅くぐる遣水の落て黄河の流れの末、和藤内は岸頭に蓑打被き座を占めて、赤白二つの川水に心を附て水の面、南無三寶紅粉が流るゝ、扱は望は叶はぬ、味方もせぬ甘輝めに母は預置かれず」と、踏出す足の早瀬川流れを止めて行先の、堀を飛越へ堀を乗越へ籬・透垣踏破り、甘輝が城の奥の庭泉水にこそ著にけれ、先母は安穩嬉しや」と飛上り、縛めの繩引ちぎり甘輝前に立はたかり、五常軍甘輝といふ髯唐人は和主よな、天にも地にも唯一人の母に繩掛

○己れを己れと 汝が獅子が城主であるから
は、一連りの事わけのわかつた故也。

○もつてうず もてなす。蓋し「もつちやうず」
〔持端〕であらう。「和漢音釋赤言字考節用集」言辭門
モ部に「持實」に「モテナス」も傍訓してある。

○はらうづ 方圖である。舞圖引きから出た語
際限。

○直附 直接。

○御邊 對稱代名詞で同輩に用ひる。そのこと。
貴殿。

○九寸五分 短刀をいふ。鐵通「よろひじほし」。
「武家名目抄」刀割部に「九寸五分」は、是亦腰刀の
類にて即ち短通しの事なり。九寸五分は其の長さ
によつた稱である。

○動轉 たまけあわてること。饅頭屋本「節用集」
に動轉「ごんてん」。

○俗難 世俗の非難。世間の非難。

○緋綾 羅はうすぎぬ。綾はやぎぬ。

○章甫の冠 細布(くるぎぬ)の冠であつて儒者
なむの冠つたもの、殷の世に章甫と名づけた。章は
明の義丈夫を表現する所以なれば章甫といふ。「禮
記經行篇」に「孔子對曰、丘、長居宋、冠章甫之
冠」。莊子に、「宋人章章甫、而適諸國、越人斷
髮、文身、無所用之」。

けたは、己れを己れと奉つて味方に頼まん爲成に、もつてうずれば方圖も無い、
味方にならぬは此大將が不足なか、第一女房の縁といひ其方から従ふ筈、サア日
本無雙の和藤内が直附に頼む返答せい」と、柄に手をかけ突立たり、「ヲ、女房の
縁といへば猶ならぬ、御邊が日本無雙なれば我は唐土稀代の甘輝、女に絆され味
方する勇士にあらず、女房を去る所もなし、病死する迄べんべんとも待たれまい、
追風次第にはや歸れ但置土産に首が置いて行きたいか、「イヤサ日本の土産に汝
が首を」と、兩方抜かんとする所を錦祥女聲を掛け、「ア、くは是なふく病死を
待迄もなし、只今流せし紅の水上を見給へ」と、衣裳の胸を押開けば九寸五分の
懷劍、乳の下より肝先まで横に縫ふて刺通し、朱に染みたる其有様母は「是は」
とばかりにて、かつばと臥て正體なし和藤内も動轉し、覺悟を極し夫さへぞろ
に、驚くばかりなり、錦祥女苦しげに、「母上は日本の國の恥を思召殺すまいとな
さるれど、我命を惜みて親兄弟を責がずば、唐土の國の恥と斯う成上は女に心引
かさるゝ、人の誹はよも有まじ、なふ甘輝殿親兄弟の味方して、力とも成てたべ
父にも斯くと告げてたべ、もう物言はせて下さるな苦しいわいの」とばかりにて

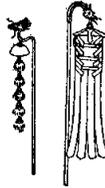
○花紋の香 花の紋形で飾つた香。

○石の帯 東帯の時に著用した革製の帯である。その革帯の背部の飾を玉又は石角で造つてあるから、石帯又は玉帯といふ。

○莫耶の劍 支那上古の名劍の名。「吳越春秋」に、吳の人干將五山の精六金の英を采り、天地を鉄「うかが」し陰陽を伺ひ百神臨視す、而して金鐵の精未だ流れず。干將その妻莫耶と髪及び爪を剪つて之を鐵中に投ず。金鐵乃ちやはらぎ遂に二劍を成せり。陽を干將といひ陰を莫耶といふと見えである。「荀子」性惡篇に「閻闔之干將莫耶、鉅闔閻闔、此皆古之良劍也。」

○衣笠 (既出)

○幢 旌幢牙旗をいひ、羽毛又は布帛を垂れた旗。



(佛教で用ひるもの)

○幡の旗 幡ははた又は「のほり」をいふ。

○吹抜 吹流しともいふ。数條の長い布を輪につけ、長い竿の先端に掲げて風に靡かすもの。

○會稽山 支那浙江省紹興府の東南にある山。

○越王 越王勾踐をいふ。支那春秋戰國時代、吳王夫差と夫椒で戦つて敗れ、會稽山に棲んで降を請うた。周の元王四年遂に夫差を滅して會稽の恥を雪いだ。この文は、越王勾踐の戰勝つた勇ましい姿を再び見る如くであるこの意。

○初の詞 前文に「此母が娘殺すを見物し、そも生きて居らうか」とあるをさす。

消へく、とこそ成にけれ、甘輝涙を押隠し「ア、出来いたく、自害を無には

させまい」と、和藤内が前に頭を下げ、「某先祖は明朝の臣下、進んで味方申へき

身の女の縁に迷ひしと俗難を憚りしに、我妻只今死を以て義を勸むる上は、心清

く御味方大將軍と仰ぎ、諸侯王に準へ御名を改め、延平王國性爺鄭成功と號し、

裝束召させ奉らん」と武運開くる唐櫃の、二重の錦羅綾の袂緋の裝束、章甫の

冠、花紋の香、珊瑚琥珀の石の帶莫耶の劍金を磨き、衣笠さつと差かくれば、十

萬餘騎の軍兵ども幢の旗幡の旗、吹抜・楯・鎗・弓・鐵砲・鎧の袖を列ねしは、會稽

山に越王の二度出たる如くなり、母は大聲高笑ひ「ア、嬉しや本望や彼を見や錦

祥女、御身が命を捨し故親子の本望達したり、親子と思へど天下の本望、此劍は

九寸五分なれど四百餘州を治る自害、此上に母が存らへては初の詞虛言と成、二

度日本の國の恥を引起す」と、娘の劍を押取て咽にがはと突立つる、人々「是は」

と立騒げば「ア、寄まい」とはつたと睨み「なふ甘輝・國性爺、母や娘の最

期をも、必歎な悲しむな、韃靼王は面々が母の敵妻の敵と、思へば討に力有、氣

を弛ませぬ母の慈悲此遺言を忘るゝな、父一官がおはすれば親には事を缺くまい

○肝の東 臟腑は束ねたものミ考へたもので、その束ねをいふ。

○一遺 義の一遺。

○釋迦に經 既に知悉してゐる者になほ教へる意にいふ語。

○庭訓 家庭の教訓。

○鬼に金棒 強き上に更に強くなる意にいふ語。

○討てば勝ち攻むれば取る 『史記』高祖本紀に「數必勝、攻必取、吾不知之勝信」。

○玉ある淵 水涸れず 『大藏禮勸學篇』

「玉房山而木凋、淵生珠而岸不枯」。

「卷五」水滸深淵、則龍魚生之」。

この文は、日本は玉淵龍池の國であることほめたのである。

○國々たり君々たる日本 國は國たる政道行届き、君は君たる道を盡し給ふ日本。

○麒麟 和譯内を麒麟兒とほめたのである。麒麟兒とは才智優れた兒童の稱。杜甫の「兒と徐卿二子」歌の句に「竝是天上麒麟兒」。

ぞ、母は死して諫めをなし父は存らへ教訓せば、世に不足なき大將軍淨瑠璃世の思ひ出是迄」と、肝の束を一抉り切さばき、「サア錦祥女此世に心残らぬか」「何しに心残らん」といへども残る夫婦の名残、親子手を取引寄せて國性爺が立出を見上、見下し嬉しげに、笑顔を娑婆の形見にて一度に息は絶へにけり、鬼を欺く國性爺龍虎と勇む五常軍、涙に眼は眩めども母の遺言背くまじ、妻の心を破らじと國性爺は甘輝を恥、甘輝は又國性爺に恥て妻の、顔隠す、亡骸納む道の邊に、出陣の門出と生死二つを一道の、母が遺言釋迦に經、父が庭訓鬼に金棒討てば勝、攻むれば取る末代不思議の智仁の勇士、玉ある淵は岸破れず、龍栖む池は水涸れず斯かる、勇者の出生す國國たり君君たる、日本の麒麟是成はと異國に、武徳を照しけり

第四 (松浦の住吉社。道行。九仙山)

登場人物の主な者

小三 睦（平戸の漁夫の女。國性爺の妻） 梅檀皇女（思宗烈皇帝の妹。思宗烈皇帝の二十二歳） 角髪結うた童子（住吉の神の化身）
 吳三 柱（思宗烈皇帝の遺臣） 老翁（明の先祖高皇帝の化身） 老翁（青田の劉伯温の化身）
 太左 子（思宗烈皇帝の皇子。七歳） 左龍（南京雲門關の將） 右龍（南京雲門關の大將）
 鄭芝龍（思宗烈皇帝の遺臣） 國性爺（和藤内の號。父は鄭芝龍。母は肥前平戸の女。二十六歳） 貝勒（王。韃靼國の鎮護大將）

梗概

肥前松浦灣に残れる小睦は、夫和藤内が唐土に渡つて國性爺と改名し、數萬騎の大將軍となつたと聞いて勇み立ち、男装して菅笠を被り、松浦の住吉社に日參する。そして神木の松を相手取つて劍道の稽古を勵む。かくて住吉神の御守護を得て商船の便を求め、梅檀皇女を伴つて唐土に渡らうとする。

〔梅檀女道行〕 秋の頃兩女は唐土に渡るを思ひ立ち、肥前の大村（東彼杵郡内）・鏡宮（松浦郡内）・みるめの浦（松浦郡内）・箱崎（筑前千代郡の松原）・松浦川七瀬淀（松浦郡内）・近の浦（松浦郡内）などの道々の景色を眺めつ、厨川（東松浦郡内）に至り、角髪を結うてゐる童子の船に乗る。船は唐土をさして沖へ出る。鬼界十二島を遙かに望んで日本の領海を離れ、順風に乗じて進む事矢の如く、渺漫たる海を越えて松江の港（揚子江の咽喉）に著く。兩女は喜んで角髪の童子に禮を述べて姓名を問へば、童子「私は住吉の大海童子と申す者である。すぐに住吉に歸つて其方等の歸朝の時を待ちませう」とて、兩女と別を告げ、日本をさして沖へ漕出す。

〔九仙山〕 明の遺臣吳三桂は、山から山へ身を隠し、太子を育てる事二年を経て、九仙山（支那福建閩侯縣城内東南隅。本曲にはこうくはふの九仙山とある）に登つた。其處には大きな眉で白髪の老翁が二人碁を圍んでゐる。吳三桂は之に近寄つて、太子を石壇の上に置き、圍碁を見ながら其の樂しみを問ふ。老翁「古書に、大地世界を以て一面の碁盤となすとある」とて、圍碁によせて天運の循環を説き、「今日日本から國性爺が渡り、大明の味方となつて戦争の眞最中である」といひ、仙術によつて其の有様を見せる。まづ櫻咲く春の頃、敵

の據れる石頭城を陥れる。尋いで夏景色と變り、南京雲門關の大將左龍虎・右龍虎が三千騎を以て關を守つてゐる。國性爺はこの關を通過しようとして、辨慶が安宅の關で勸進帳を讀上げた例に倣つて、行者を裝ひ、巻物を披いて、楊貴妃の廟太眞殿再興勸進の文を讀上げる。關守は國性爺たるを看破し、喚き掛つて搦めようとする。國性爺につこと笑ひ、「焚燗流は珍らしからず、門を破るは日本の朝比奈流を見よ(この解は「心中天の」網鷲の中に述べた)」とて、貫の木・逆茂木押破り、關守等を叩き伏せ、逃けるを攔んで投飛ばし、左龍虎・右龍虎を討取つて過ぎる。忽ち秋と變り、國性爺軍を進めて、韃靼の軍將海利王の立籠る堅城を夜襲し、火を放つて之を占領する。やがて冬景色と轉じ、國性爺が北州の長樂城を略取し、進んで三十八城を抜き、太子の行啓を待つてゐる様子が見える。吳三桂は大いに喜び、太子を抱いて國性爺の城に走り行かうとする。老翁之を止めて、「手に取るやうに見えても、實はいづれも百里を隔ててゐる。汝がこの山に入つて一時の間と思へども、既に五年の春秋を経た。忠誠を勵むをめでて、明の恢復する様を見せたのである」とて、二人の老翁は、「我は明の先祖高皇帝である」。「我は青田の劉伯溫(明の太祖の帷幕に參人)である」と名乗つて、共に其の姿が消える。吳三桂は今見た事を太子に語つて喜ぶ。

折から梅檀皇女・鄭芝龍・小睦が連立ち、吳三桂を尋ねて來り、太子の御無事を喜んで昔語りをしてゐる際、敵將貝勒王大舉して攻寄せた。吳三桂即ち天を拜し、太子と共に高皇帝・劉伯溫の擁護を祈る。姫宮・小睦は住吉大明神の御加護を祈る。忽ち感應あつて雲梯が出現する。そこで一同は怖るく之を渡つて對ひの山に達した。其の後で敵兵五百餘騎駈寄せて雲梯を渡り、其の半ばに來た時、風俄かに起つて雲梯を吹拂ひ、敵將始め悉く谷間に落ち重なり、面額を打割り或は首を折り、泣き喚きながらうよくしてゐる。吳三桂・鄭芝龍は大石大木を投落して之を壘殺にする。貝勒王は岩根を傳ひ葛に取附いて這ひ登る。吳三桂これに碁盤を投附ければ、貝勒王の頭の鉢碎け、豆腐を石に打附けた如く散亂した。かくて吳三桂等皆打連れ、福州の城に入つて國性爺と會する。

第五 (福州の城内。)
南京城

登場人物の主な者

- 永曆 皇帝 (思宗烈皇帝の子)
- 梅檀 皇女 (思宗烈皇帝の妹)
- 吳三桂 (司馬將軍)
- 甘肅 輝 (散騎將軍)
- 國性爺 (延平王。父は老一官。母は肥前老官。もと鄭芝龍といふ。七十三歳)
- 李 躒 (明の逆臣)
- 老一官 (もと鄭芝龍といふ。七十三歳)
- 敵味方の軍大勢

梗概

太子の一行は福州の城で國性爺と會合し、太子は天子の印綬を佩じて帝位に即き、永曆皇帝といふ。國性爺乃ち龍馬が原に八町四方の木城を築いて皇帝を移し、吳三桂・甘肅と共に韃靼王討伐の謀を議する。吳三桂の策は、「竹筒に火薬を裝填して蜂を入れた物數千本を作り、食物を容れたやうに見せて敵に之を拾はせれば、蜂が群れ出て螫すのに驚き、竹筒を燒拂はうとするであらう。其の時火薬が爆發して、敵は皆死ぬであらう」といふ。甘肅の策は、「飲食物に鴆毒を入れ、敵を誘つて毒殺したらよからう」といふ。

國性爺は、千里が竹で捕へた島夷等を日本流に結髪させてゐるから、之を先鋒に立てて日本からの援兵の如く見せ、敵が恐れて腰を抜かすに乘じ、遮二無二斬入つて韃靼王の首を刎ねよう」と主張する。

この時梅檀皇女立出でて、老一官の旗と老一官自筆の書狀とを國性爺に渡す。其の文に、「今日今夜南京城に肉薄して討死すべし」とあるので、國性爺の軍評定も突撃する事に決した。

老一官は敵の城門に到つて李躒天に決闘を申込んだ。韃靼王は壽陽門の櫓から之を見、部下に命じて老一官を生捕らせた。折から國性爺は死を決して南京城に逼り、城將に陥落しようとする時、韃靼王・李躒天は老一官を縛して國性爺の眼前に出し、汝

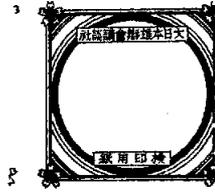
切腹するか、或は日本に還るかしなければ、汝の父の首を刎ねる」といふ。老一官「親は八つ裂にされても目もくれるな。大義を守つて邁進せよ」と勵ます。そこで國性爺が進まうとすれば、李蹈天は劔を父に擬する。國性爺は之を見てどうも進まれない。甘輝と吳三桂とは、かうなつては急ぐべからずと思ひ、鞞韃王の前に進み出て頭を下け、「我々の運命も最早盡きました。我々兩人をお助け下さらば、國性爺の首を取つて差出します」といつた。鞞韃王は之を聞き、喜んで油斷する。其の際に兩人は速かに起ち、王を蹴倒して縛り上げる。國性爺も急に起つて父の縛を解き、李蹈天を取つて押へ、高手小手に繩を掛ける。かくて鞞韃王をば半死半生に撲ちのめして、本國に逐返し、李蹈天の首を引抜く。ここに於て國亂平らぎ、再び明の代となる。

有共者行發者著は權作著書本

昭和十年五月十日印刷
昭和十年五月十八日發行

釋義と真叢書
傑作淨瑠璃身

製複許不



著者 樋口慶千代

東京市豊島區駒込五丁目九百七十五番地

發行者 野間清治

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

印刷者 井上源之丞

東京市本所區飯橋一丁目二十七番地ノ二

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

大日本雄辯會講談社

(振替東京三九三〇番)
電話(34) 代表 五六三〇〇番
牛込(34) 六二〇〇番
五六三〇〇番

(本製地海天)